湯川秀樹論

天野　雅郎

1：逝く水の流れの底の美しき小石に似たる思ひ出もあり

湯川秀樹について、あれこれ書き留めておきたいことがあるので、この場を借りて筆を執る。一応、湯川秀樹論と題してはいるが、もとより物理学者としての湯川秀樹を論じるのが本意ではないし、そもそも現在、物理学者としての湯川秀樹を論じるとは、どのような意味を持つ行為なのであろう。と問い質せば、おそらく湯川秀樹は物理学者ではあっても、それは現在の時点での物理学者ではなく、あくまで過去の時点での物理学者であって、例えば『湯川秀樹著作集』を手に取り、その「学術篇」や「欧文学術論文」を繙き、これを読んでいる研究者（すなわち、専門家）は皆無なのではなかろうか。もっとも、これは特段、湯川秀樹に限った話ではなく、例えば彼と、ほぼ同年代の朝永振一郎や伏見康治や、あるいは、いささか年長の中谷宇吉郎や山内恭彦や、さらに遡れば、あの寺田寅彦や石原純といった錚々（そうそう）たる顔ぶれですら、もはや彼らは物理学者として遇されるのではなく、むしろ科学史家の研究対象と見なされるに過ぎないであろう。

当たり前のことである、と言えば言える。ただし、このような事態は物理学を始めとする、いわゆる自然科学（natural science）に特有の、いたって特異な事態でもあって、これが社会科学（social science）や人文科学と、もっぱら日本語で呼び慣わされている人文学（humanities）の領域では、かなり様相を違える事態であったことも確かである。その点、本稿が掲載予定の、この『年報』は、少なくとも科学（すなわち、個別科学や特殊科学）のための専門誌ではなく、その誌面に投稿する資格が専門家（すなわち、科学者）であることをも要しない訳であるから、要は自由に、おおっぴらに、と言うと語弊はあるけれども、その名の通りの教養（liberal arts＝自由学芸）の流儀において湯川秀樹を扱い、たとい彼が物理学者として、いくら賞味期限を過ぎてはいても、と言うと、これまた不謹慎この上ないが、それにも拘らず、それぞれの論者が独自に、その固有の湯川秀樹論を書く由縁を、あらかじめ手に入れていることにもなるのである。

もっとも、このように述べたからと言って、そもそも本稿が湯川秀樹を賞味期限の過ぎた、もしくは、切れた物理学者と見なしている訳では、さらさら無いことも、やはり最初に、ことわり（断＝理）書きをするべきであろうし、それは本稿の、ことさら吹聴（ふいちょう）するべき事柄でもなかったはず。なぜなら、ちょうど20世紀

の幕開(オープニング)きと共に、これに歩調を合わせるかのごとく誕生し、今から100年ばかり前（すなわち、1920年代）になって、とりあえず確立し、完成したとされる「量子力学」（quantum mechanics）は、その基礎づけ自体が専門家の言を踏まえても、いわゆるエポケー（epoche＝判断中止）の上に、辛うじて成り立つものでもありえたからである。この間の事情に関しては、さしあたり『物理学の世紀』を始めとする佐藤文隆の、一連の「アインシュタイン」物（いわゆる、孤独になったアインシュタイン）が最適の指南役であろうが、その「孤独」を、かなりアインシュタインと似通う形で共有しているのが湯川秀樹でもあった。

と書き継いで、ふと先刻来、ある種の不安が本稿には兆していて、例えば現在、仮に大学の授業で彼の、あの昭和二十四年（1949年）に日本で最初の「ノーベル賞」を受賞した、その破顔の写真を示すとしたら、これを湯川秀樹だと分かる大学生は、いったい何人に上るのであろう。また、これが昭和四十年（1965年）になって、今度は二人目の「ノーベル賞」を受賞した朝永振一郎になると、その名前すら、おそらく昨今の大学生の多くは知らず、これを朝永(ともなが)ならぬ朝永(あさなが)と読む大学生まで後を絶たないはずである。と、このような暴言を吐いているのは、つい先日、実際に彼の最新刊（『見える光、見えない光』）を授業で取り上げたからに他ならないが、この本が出版されたのは平成二十九年（2017年）であるし、今でも彼の『鏡の中の物理学』や『物理学とは何だろうか』は文庫や新書で読むことの出来る、いわゆるロング・セラーでもあるし、と高を括っていたのが大きな間違いであることに、ようやく気が付いたのも後の祭りであった。

と言うことは、このまま話を、どんどん先に進めていくのは危険きわまりない愚行であることにもなり兼ねない。が、つらつら考えると、それは何と悲しく、切なく、侘しい事態なのであろう。なにしろ、このような断絶は青少年の頃、その湯川秀樹や朝永振一郎に憧れ、高校生（それどころか、中学生）の頃から物理学の勉強に励み、将来、是が非でも「物理学者」になろうと志した日本人が、それほど周囲に奇異の感を催されずに済んだ時代が確実に存在していたことを、きっと昨今の日本人の目や耳から遠ざけ、信じ難いものにするに違いないのであるから。なお、そのような世代(ジェネレーション)のことを振り返りたければ、ふたたび前出の佐藤文隆の『宇宙物理への道』や、そのタイトルだけでも、すでに充分に湯川秀樹へのオマージュともなっている『ある物理学者の回想』を、その手に取るに若(し)くはないが、いささか気掛かりなのは、このような回想を回想として、はたして昨今の高校生や大学生は、その身に受け止めることが出来るのであろうか。

ともあれ、このようにして辿り直すと、そもそも湯川秀樹が「ノーベル賞」を受賞したのは、もう今から70年ばかりも昔の出来事になるし、当然のことながら、それは昨今の日本人の多くにとり、いわゆる未生（みしょう）以前の出来事にならざるをえない。唯一、違う点があるとすれば、それを父母（ぶも）未生以前（夏目漱石『門』）の出来事として受け止める日本人と、父親であれ母親であれ、すでに親が今生（こんじょう）の人として、この世に生を享け、言ってみれば、この湯川秀樹の「ノーベル賞」の受賞に生身の体で接していた日本人とに、二分されることになるであろう。また、これは幾分、私的（プライヴェート）な事情（と言うよりも、心情）ではあるが、その親が昭和二十年（1945年）の戦争終結の直前、広島や長崎で原子爆弾（atomic bomb）の被災に遭い、その災禍を、みずからも引き続き背負わざるをえない側なのであれば、やはり湯川秀樹の原子力（atomic energy）の研究と、その後の平和運動に対して、これを他人事では済ませない面があることも確かである。

その点、幸運にも、と言い出すと語弊はあるが、そもそも彼が生まれてから、とうに110年余りの時が流れ過ぎ、亡くなってからでさえ、すでに40年近い歳月が経過した今、その生涯と業績には、ようやく光を当てることの可能になった領域が存在していることも疑いがない。ちなみに、彼の生年は明治四十年（1907年）であり、没年は昭和五十六年（1981年）で、享年は満74歳であったけれども、このような彼の人生に対して、目下、私たちが目を通すことの叶う評伝には、いちばん最近のものでは小沼通二の『湯川秀樹の戦争と平和』を挙げることが出来るし、次に新しいのは益川敏英の『湯川秀樹』であったろうが、これらが揃って「岩波ブックレット」と「NHKこだわり人物伝」の、ごく短い、いずれも簡便な評伝であったことからも窺える通り、現在でも私たちが彼の人生を振り返る際には、これまで彼自身の書いた、その自伝（オートバイオグラフィー）である『旅人』を凌ぐ、これに勝る「ある物理学者の回想」は存在していないのが実情なのである。

なお、この場において付け足しておくべきは、あくまで「入門編」という監修者の注釈付きではあるが、おそらく現在、最も標準的（スタンダード）な湯川秀樹伝として、これまた佐藤文隆（監修）の『素粒子の世界を拓く』を挙げることが出来るであろう。が、この評伝は「湯川秀樹・朝永振一郎の人と時代」という副題を伴い、その編集も「湯川・朝永生誕百年企画展委員会」であったから、これは湯川秀樹伝と言うよりも、むしろ彼と朝永振一郎とを結び付け、この二人の「同級生」が生まれ、育ち、やがて世界の檜舞台へと飛躍した、その時代（time＝潮流）を背景に、彼らの生涯と業績を辿り直すのが趣旨であったし、また、その時代を「ともに生きた世代」と「ともに生きなかった世代」との間を埋め、繋ぐための試みでもあっ

た。事実、この時、平成十八年（2006年）から翌年に掛けて、お互いに「生誕百年」を迎えた両者のために、さまざまな企画展が催されたのでもあり、その「副産物」が要するに、この『素粒子の世界を拓く』でもあった次第。

ところで、つい今し方、湯川秀樹の破顔の、満面に笑みを湛えた写真と言ったのは、彼が「ノーベル賞」の受賞の翌年、一時的にアメリカから帰国した際、それを写真家の土門拳が撮った、いかにも絢爛豪華な一枚であったが、それは裏を返せば、彼が当時、日本には不在であった事態と裏腹である。そこで簡単に、ここで湯川秀樹の来歴を遡っておくと、まず彼が京都帝国大学を卒業するのが昭和四年（1929年）で、その3年後には同大学の講師となり、それから3年後には大阪帝国大学の講師となって、さらに3年後には同大学の助教授となっている。いわゆる素粒子（elementary particle）や中間子（meson）を彼が予言するのは、この時期であった。そして、その業績が評価され、彼が数えの33歳で京都帝国大学の教授となるのが昭和十四年（1939年）のことであり、その3年後には東京帝国大学の教授も兼ね、その翌年には史上最年少の「文化勲章」を受章する。ここまでが、彼の戦前（すなわち、第二次世界大戦前）の履歴である。

もちろん、ここから戦後になって、彼が「ノーベル賞」を受賞するに至るまでには、その間に彼の予言した、現在では「パイ中間子」（π-meson）と呼ばれている素粒子の実在が、実際に実験で実証される必要があり、それが戦前と戦後とを跨ぐ、この十数年間であったことにもなる。御年（おんとし）、満42歳。これは今でも、日本人の「ノーベル賞」受賞歴の中では最年少の記録であるけれども、この受賞の知らせを受けた折、先刻も述べた通り、彼は前年からアメリカのプリンストン高等学術研究所の、また、この年からはコロンビア大学の、それぞれ客員教授を務めており、彼が日本に帰国をするのは昭和二十八年（1953年）になってから、京都大学に基礎物理学研究所（Research Institute for Fundamental Physics）が創設され、その初代所長に彼が就任する時を俟たねばならなかった。なお、この研究所は平成二年（1990年）以降、英語名のみが湯川理論物理学研究所（Yukawa Institute for Theoretical Physics）と改められ、現在に及んでいる。

2：わかれさす光かそけき深山木の道ふみわけし人し偲ばゆ

さて、このようにして湯川秀樹は私たちの国の、押しも押されもせぬ「物理学者」であるし、なおかつ彼は、諄いようではあるが、この国で最初に「ノーベル賞」の栄誉に輝いた、その意味において、日本を代表する「科学者」の一人でもある。この辺りまでは、おそらく昨今の高校生や大学生でも、それほど蚊帳（かや）の外

ではないであろう。が、そのような彼が一面、その歌集を編むほどの、かなり多くの歌（すなわち、和歌）を詠み続けた人であることを、はたして昨今の日本人は、よく弁(わきま)えているであろうか。この点に関しては、近年、平成二十八年（2016年）に講談社文芸文庫に『湯川秀樹歌文集』が登場し、若干、状況に変化の兆した感がないではない。ただし、そのような彼が歌人とは、とうてい呼びえないにせよ、その生涯、彼一流の趣味（hobby＝子馬）として、ひたすら歌を詠み続けた人であることと、この「物理学者」や「科学者」の業績との間には、実は深い、切っても切れぬ関係があったのだとしたら、さて、いかがであろう。

ちなみに、せんだって本稿の冒頭に日本の物理学者の面々を、とりわけ19世紀から20世紀に掛けての頃、この国に生まれ合わせた顔ぶれを中心にして、その名を挙げておいた訳であるが、それが偶々、この場において偶然に並べられたものではなく、そこには本稿の目論見(もくろみ)が、かなり色濃く反映済みであることも了解の範囲内であるはず。言い換えれば、彼らは揃って、その軸足を自然科学と共に、これと並んで人文学(ヒューマニティーズ)の、その名の通りの人間性（humanity＝人間愛）の側にも置き、言ってみれば、物理学者が「年がら年じゅう物理のことばかりを考えて、それで一生を終わるというのは本当に人間らしい生き方ではない」と考えていた人たちであり、その点、彼らは世間一般の物理学者の枠を超えた、さしずめ文理融合の物理学者であったことになるし、それが彼らの独自性と、その共通性でもあった。余計な、お世話である、と叱り付けられる前に申し添えておくと、これは湯川秀樹の「和歌について」からの引用であったので、念のため。

なお、このようにして本稿が先刻来、いささか度を越した発言を繰り返しているのは、この数年、和歌山大学の教養教育科目（「教養の森」ゼミナール）において、例えば西田幾多郎の『善の研究』や、あるいは、湯川秀樹や朝永振一郎の恩師でもある岡潔や、その同世代の三木清や小林秀雄や、つい先程、本稿の冒頭に名を挙げた中谷宇吉郎や、無論、ご当人の湯川秀樹をも含めて、彼らの随筆集や対話集を昨今の大学生と教員とが、お互いに授業を介して読み合う、という場を設けてきたことが、その背景にある。そして、そのような取り組みを通じて、いかんせん、もはや湯川秀樹や朝永振一郎は過去の時代の、なかば忘却された物理学者に過ぎないのではなかろうか、という感慨を催したのも事実である。が、それと同時に、そのような忘却は若い世代ばかりか、そもそも昨今の日本人の全体に、総じて該当するものであり、しかも、そこには大きな誤解や錯覚や、どうやら見落としが潜んでいるらしい、と気づいたのも有意義な収穫であった。

見落としは、そのまま見貶としでもある。なぜなら、このようにして揃いも揃って、と言い出すと、いかにも好ましからざる物言いのようではあるが、これらの思想家や教養人、と総称しておくけれども、彼らは揃いも揃って、ほぼ20世紀がスタートを切る頃に生を享け、その生涯が、まさしく世紀（century＝100年）の分岐点（ターニング・ポイント）と共に始まっている。そのこと自体には、やはり目を見張らざるをえないであろうから、あらためて確認しておくと、さしあたり年長の西田幾多郎を唯一の例外として、彼らの生年は明治三十年（1897年）の三木清を筆頭に、その後は明治三十三年（1900年）の中谷宇吉郎、その翌年の岡潔、翌々年の小林秀雄と続き、しばらく間を置き、明治三十九年（1906年）の朝永振一郎、その翌年の湯川秀樹となり、ちょうど湯川秀樹は前述の通り、明治四十年の生まれである。もちろん、これを西暦で振り返る方が、はるかに昨今の私たちには分かり易く、通りは良いが、それが相応しいのかどうかは別問題であろう。

ともあれ、このようにして明治時代の、ほぼ同時期に生を享けた、例えば中谷宇吉郎や朝永振一郎や湯川秀樹のような物理学者が、現在、ごく普通に私たちが「物理学者」と呼んでいる人たちとは、その生涯においても、業績においても、かなり違う印象を私たちに与え、その風貌一つを取っても、そこに私たちの面立（おもだち）とは、けっこう異なるものが兼ね備えられていたことは疑いがない。はなはだ素朴な言い回しとなり、恐縮ではあるが、それは何故（なぜ→なぞ）なのであろう。なるほど、そこには彼らの生まれ、育った時代に固有の人間関係があるし、その特有の生活環境の中で、さまざまな人生経験を彼らが積み、そのことを介して、彼らが一人の物理学者となったことは確かであろう。が、そのような要因を幾つか、あれこれ拾い集めた所に彼らの生涯と業績と、その個性（individuality＝非分割態）は産み出されうるのか知らん、と問い掛けると、どうやら少々、腑に落ちない、すっきりしない何かが、私たちの側に残されるのは否み難い。

その何かを、つい今し方、思想家や教養人という語を用いて、とりあえず本稿は提示しておいたのであるが、それは翻れば、昨今の私たちと彼らとの間にあり、彼らが当たり前に手にしていて、逆に私たちの手からは、ほぼ抜け落ちてしまっており、もう掴み取るのも容易ではない、そのような何かを表現するために、これより的確で、かつ適格な語が、目下、私たちの語彙（ヴォキャブラリー）の中には見出しえない、という理由からに過ぎない。したがって、これ以上に、より相応しい語が私たちの辞書（ディクショナリー）に書き込まれているのであれば、その折には逸早く、これらの語を用済みの、お役御免の語として扱っても構うまい。また、この場において付け加えておくべきは、この思想や教養という語が彼らの場合、表立った、いわゆる現勢力

（actuality→actual energy）として姿を見せるよりも、むしろ控え目で、目立たない、と言うと言い過ぎではあろうが、その反対の潜勢力（potentiality→potential energy）として機能していた面が強い、という点であろう。

その一つが、例えば湯川秀樹に典型的な形で具現されている、彼の文学的な、とりわけ中国文学と日本文学とを通底する、その教養であったが、それを彼に宛がう際は、いまだ明治時代には使われていない「教養」という語で呼ぶのが相応しいのか、むしろ「修養」とか「修練」とか、このような明治時代に固有の、特有の語を用いるのが適切なのか、という躊躇（ためらい）は残らざるをえない。とは言っても、やはり彼の青少年期は大正時代の、その真只中に位置づけられうる訳でもあるし、その点、彼の「青春」（『旅人』）が当時の若者の、ご多分に漏れず、大正十年（1921年）に出版された、あの倉田百三の『愛と認識との出発』や、それに先立って、すでに大正三年（1914年）から刊行され出していた、阿部次郎の『三太郎の日記』の影響圏に、どっぷりと漬かるものであったことは多言を要しまい。その意味において、いわゆる歌（すなわち、和歌）への彼の傾倒も、このような「大正モダニズム」に背反するものと捉えるのは間違いであろう。

実は先刻、この稿の冒頭（1：）に節題として掲げておいたのは、そのような彼の歌集である『深山木（みやまぎ）』の、いちばん始めに置かれている歌であり、それは後年、昭和四十五年（1970年）になって、彼が満63歳で京都大学を定年退職し、名誉教授の称号を授けられた後、その翌年に退官記念に当たって上梓した、その名の通りの私家集であったが、その上梓に先立って、彼は前掲の「和歌について」と題する講演も行なっている。この講演の内容は、また追って、いろいろな形で立ち返ることになるであろうが、その中に彼が自分の歌を、どのように自己評価をしていたのかを窺わせる箇所があるので、ご参照を。なお、そこで彼は最初に、この歌（逝（ゆ）く水（みづ）の／流（なが）れの底（そこ）の／美（うつく）しき／小石（こいし）に似（に）たる／思（おも）ひ出（で）もあり）を挙げて、その後に「私の歌は、全部きわめて表現が親切、丁寧で、やや説明過剰の気味があり、読んだらすぐわかるようになっているんです。むずかしい歌は一つもない、あまり平明過ぎるのが欠点です」という一文が続いている。

どこまでが本気で、どこからが冗談なのかは定かではない。この点は、しばしば湯川秀樹の講演を読む度に、これを聞くことの叶わなかった側の催さざるをえない、ある種の負い目や引け目ではあるけれども、言い出しても詮の無い話ではあろうが、悔いの残る話ではある。ちなみに、この講演の言を踏まえると、どうやら『深山木』は当初、昭和四十六年（1971年）に彼の「自選集」が出版される

折に、その第五巻（『遍歴』）として編まれたのが最初らしく、それが私家本となり、やがて上記の上梓に至ったのが順序のようである。事実、この歌集の末尾には「夢」と題された部立があって、そこには「昭和四十五年、年頭の感」と銘打ち、そのまま「深山木（みやまぎ）」の歌（わかれさす／光（ひかり）かそけき／深山木の／道（みち）ふみわけし／人（ひと）し偲（しの）ばゆ）が置かれているし、さらに翌年に至って、念願でもあった「盛岡市に近き渋民（しぶたみ）村に石川啄木の遺跡を訪ふ」際の歌が十首、並べられてもいて、この年の秋で一応、湯川秀樹の『深山木』は閉じられることになる。

石川啄木については、この「天才歌人」の歌を湯川秀樹が特に好んだことが知られており、その理由は昭和四十八年（1973年）の、まさしく『天才の世界』の中で彼自身が詳しく述べている点でもあり、この場において若干、言及しておきたい箇所がない訳でもないが、横道に逸れることが多いので後回しにする。ただし、その石川啄木の、例えば「いのちなき／砂（すな）のかなしさよ／さらさらと／握（にぎ）れば指（ゆび）の／あひだより落（お）つ」（『一握の砂』）という一首を、その名の通りの「啄木の歌」という一文で、湯川秀樹は一人の歌人の歌ではなく、これを一人の物理学者の歌として受け止めているから、この点だけは、この場において注目しておくことにしたい。言い換えれば、それは先刻の「深山木」の歌が、一方では石川啄木や、あるいは西行を始めとする歌人たちの、その後姿を偲びつつ、もう一方では確実に、この年の初めに亡くなった、物理学者のマックス・ボルン（Max Born, 1882～1970）を追懐するものであったこととも通じ合っている。

3：障子はずし硝子戸ばかりになりし居間庭の景色を新らしと見る

その点、極言すれば湯川秀樹にとって、歌と物理学とは同じ人間の行為の別々の側面でもありえたことになるであろう。事実、この一文には「自然界の真理をつかもうと、どんなに努力しても、砂のようにさらさらと指のあいだから抜けていってしまう。そういうもどかしさ、私が何度も経験した気持、それがこの歌によって実に見事に表現されていると私は思う」と記されていて、いかにも湯川秀樹らしい感想（と言うよりも、感慨）が添えられている。いかにも、と言ったのは他でもない。この歌に対して、そもそも「啄木自身はもっと違った気持を表現したのであろうが、そのせんさくは私には不必要である」と言い切る辺りに、やはり湯川秀樹の湯川秀樹らしさは潜んでいるであろうから。なお、この歌が詠まれたのは明治四十三年（1910年）の秋であったから、この時、湯川秀樹の方は数えの4歳に過ぎず、この歌が同年の、あの「大逆事件」の渦の中で生み落とされた歌であると気づくのは、いったい彼が何歳の時分であったろうか。

ともあれ、この「啄木の歌」という一文は、元来、昭和三十六年（1961年）に書かれたものであったが、やがて「自選集」に収められ、歌集の『深山木』と同じ年に日の目を見ている。そして、そこには「歌五百／とはに朽ちせぬ／君を思ふ／北上川の／冬枯れの岸」という一首が、あたかも相聞歌のごとく、この一文の末尾には添えられていて、はなはだ印象的でもあったが、この年の出来事については、追って少々、補い足したいことがあるので、その折に。なお、このようにして歌と、より広く捉えれば、詩と科学との類似性や共通性は、目下、私たちの時代が湯川秀樹に対して抱く、その最大の関心事でもありえたのではなかろうか。以下、この点に関しても改めて、また立ち返ることになるが、例えば昭和二十一年（1946年）に彼の書いた、その名の通りの「詩と科学」という一文は、これが「こどもたちのために」と称する副題を伴っていたことからも窺える通り、要は子供向けの短文でありながら、その内容は至って重厚であった。

と書き継いで、ふと疑問に感じたので付け加えておくが、この時、この短文を湯川秀樹は、はたして一般向けの「こどもたちのために」書いたのであろうか、それとも彼自身の、個人向けの「こどもたちのために」書いたのであろうか。と問い質すと、いかにも持って回った言い回しのようであり、かなり気が引けるけれども、結果的に彼には二人の、それぞれ春洋と高秋と呼ばれる息子、すなわち、長男と次男とがいて、この二人の挿話も後で、また差し挟むことになるが、長男の方は昭和八年（1933年）に、次男の方は、その翌年に生まれており、いわゆる年子であった。と言うことは、この二人の息子が相次いで誕生した折、ちょうど湯川秀樹の中にも、あの中間子の着想が懐胎し、これを“On the Interaction of Elementary Particles”と題される英文論文に仕上げ、公表する段階に及んでいる。この間の事情についても、やがて彼の自伝である『旅人』を介して、その「十月初めのある晩」に立ち入ることになるから、この場は省く。

ところで、すでに触れた通り、彼の歌集の『深山木』の末尾には、まず昭和四十五年（1970年）の年頭から始まって、その翌年の秋に掛けての歌が、いろいろ収められているが、これらが「夢」という表題の下に並べられているのは興味深い。もちろん、それが直接には湯川秀樹の、あの李白の「春夜、桃李園に宴するの序」（春夜宴桃李園序）へのオマージュであったのは、この詩の冒頭（天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若夢）を彼自身が「思ひ合はされて」と、わざわざ注釈を添えていることからも明らかであろう。それならば、この際の「夢」も例えば、この一節を松尾芭蕉が「月日は百代の過客にして、行き交ふ年も、また旅人なり」と、例の『奥の細道』の冒頭で敷衍しているごとく、ここで

も湯川秀樹は湯川秀樹なりに、この詩に対して「天地は／逆旅なるかも／鳥も人も／いづこよりか来て／いづこにか去る」という歌を配し、これを献じたのだと思い至れば、それで納得は行くかのように感じられないではない。

ちなみに、まず李白の詩には「夫」とあって、その先を読み下すと、そこから前掲の「天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の如し」が続く。当然、この際の「百代」は「ひゃくだい」（＝呉音）ではなく「はくたい」（＝漢音）と読んでも、いっこうに構わないけれども、むしろ印象深いのは、なぜか湯川秀樹が李白の詩の中の、その後に並んでいる「歓を為すこと幾何ぞ」（為歓幾何）を、すっかり省いてしまっていることではなかったであろうか。もっとも、これを単に印象深いとか、あるいは興味深いの一言で片づけてしまうのは、この「天地は」の歌の直前に、この年、昭和四十六年（1971年）の2月9日、にわかに彼の次男が逝去するという出来事が差し挟まっている点を踏まえると、やはり慎むべき文言ではあったに違いない。『深山木』には「次男高秋の死に遭ひて」と題して、まさしく「夢」の歌（ふるさとに／帰りきし子の／行末の／あらましごとも／夢と消えにし）に続く3首が含まれている。

このようにして振り返ると、どうやら湯川秀樹の歌は、たびたび彼が告白し、自嘲しているように、その「余技」であったり「趣味」であったり、はたまた「安息所」（「安息所として――短歌に私の求むるもの」）であったりするよりも、それ以上に、むしろ彼が一人の物理学者であり、科学者であることにおいて、かなり重要な役割を果たしており、それどころか、その活動の中核に位置づけられうるものでもありえたのではなかろうか、という推測すら成り立ってくる。しかも、あえて先走った物言いをしておくと、このような歌との関わりや付き合いは、決して湯川秀樹の特殊な、特有の性格ではなく、ましてや彼の歌が、このような物理学者や科学者の歌としては、いわゆる独擅場の、独り舞台である訳でもなく、結果的に彼の歌は一連の、言ってみれば、このような「短歌を詠む科学者たち」（松村由利子）の系譜に連なるものであり、その筆頭に置かれるべき人でもあったことを、あらためて私たちは想い起こす必要があるであろう。

もっとも、あらかじめ補足を加えておくと、例えば上記の「安息所として」の中で、彼が出版社の求めに応じつつ、そこに「短歌に私の求むるもの」という副題を添えながら、その実は「短歌」という呼び名ではなく、これを「和歌」と称した方が、むしろ彼には「ぴったりする」と述べていたのは注目されてよい。なぜ「短歌」ではなく「和歌」なのであろうか。おいおい、この点についての私見

は述べていく予定ではあるが、さしあたり彼自身の意見に耳を傾けておくと、次の通りであるから、ご一読を願いたい。「殊に自分の専門は近代的な物理学の中でも最も尖端的な領域であり、読んだり見たりするものとしては小説もあり、詩もあり、映画もあり、所謂近代的なものには事かかない。むしろその反対に短歌――というよりも「和歌」といった方がぴったりする――がその古めかしさの故に、頭脳の疲れを休める安息所ともなり得るのではないかと思っている。所謂批評的精神を時々眠らせるのが私に取っては精神の健康法の一つである」。

この一文は、実は古く、遡って昭和二十二年（1947年）のものであるから、ちょうど湯川秀樹が40歳の時のものである。多分、誤解を恐れずに、はなはだ率直に言うと、その言い回しよりも若さの方が勝っている、と評しうるであろうが、この時点での彼は、ひょっとすると自分と「和歌」との深い繋がりの、その奥底を覗き込むためには、いまだ時間の堆積が足りなかったのではあるまいか、と思わせる節がないではない。と言ったのは、この段階から彼が、やがて『深山木』の末尾の「夢」の部立に辿り着くまでには、それ相応に多くの、人の生き死にと出会い、関わり合う必要があったからであり、その筆頭が彼の、先刻の次男の逝去の折の歌でもあったであろうが、それが前年の年頭に、こちらは彼の長男（春洋）が授かったばかりの「孫娘」の歌と並んで、まったく同時期に、あたかも「庭にくる鳥」のようにして詠まれているのには胸を打たれる。「おじいちゃん／しかしと二歳児は／われにいひて／あとははははと／楽しげに笑ふ」

なお、この「庭にくる鳥」という詞書から、そこに朝永振一郎の、まったく同名の随筆を想い起こされる向きも、おそらく多いのではなかろうか。この点については、また別の機会に、別の形で筆を執り直したいので、今は措く。ともあれ、このようにして『深山木』の末尾には、次から次へと「鳥」の歌が、現の鳥の歌（庭の木に／むれくる鳥の／いつしかに／声も姿も／色もかはりつ）も、夢や幻の鳥の歌（湖の／中の葦間に／湯気たてり／遠き日に見し／鷺の幻）も含めて、連ねられているのであるけれども、それらが湯川秀樹にとっては、いずれも周囲の、忘れ難い人の声や、その姿や、それどころか、それぞれの「人の魂」と繋がるものであったことは、この場で縷説するまでもなく、そうであるからこそ、これらの歌が最終的に辿り着く先に、あの「天地は」の歌は、はじめて位置づけられるべきものであったに違いない。もう一度だけ、引いておこう。「天地は／逆旅なるかも／鳥も人も／いづこよりか来て／いづこにか去る」

そして、その最後に、最後の最後として置かれていたのが先刻、この節の表題

（3：）として掲げておいた「障子はずし」の歌（障子はずし／硝子戸ばかりに／なりし居間／庭の景色を／新らしと見る）であった。詞書には「障子をはりかへる日」とあるから、この歌が「障子はる」の季語の通り、秋の歌であったことが分かるが、湯川秀樹の年譜に即して言えば、この年の2月から上記の岩手旅行と、あの石川啄木詣と次男の逝去と、それから月に一度、京都大学の基礎物理学研究所での「渾沌会」がスタートをする中、その傍らでは彼の「自選集」の刊行が続いている。推察するに、その最終巻である『遍歴』が出版されるのが6月30日であり、それを歌集の『深山木』として上梓するのが8月であるから、この「障子はずし」の歌は夏から秋へと、この年が慌しく過ぎていく折の感慨ではあったろうが、それが「新らし」と綴られているのは、これは湯川秀樹の「あらたし」ではなく「あたらし」への、やはり執着でもありえたであろう。

4：雪近き比叡さゆる日々寂寥のきはみにありてわが道つきず

ところで、前掲の「詩と科学」の冒頭は、この両者が「遠いようで近い。近いようで遠い」と、さながら『枕草子』の一節をも髣髴とさせるような言い回しで始まり、その理由として「出発点が同じだからだ。どちらも自然を見ること聞くことからはじまる」と、これまた湯川秀樹らしい物言いが続くが、この辺りは清少納言の、あの「遠くて近きもの。極楽。舟の道。人の中」（もしくは、男女の中）と、さほど変わる点はない。と言い出すと、いかにも不埒な、詩と科学との違いも弁えぬ輩のようであり、恐縮この上ないが、そもそも「極楽」にせよ「舟の道」にせよ、これらが遠い、遠い、と感じている間に、いつの間にやら時は流れ過ぎ、その「極楽」のとばぐちに、また「舟の道」の終点（end＝目的）に、いつも私たちは立たされるのであって、これは当時、多くの女性が旅をすることも儘ならぬ時代に、一人の女官の類稀な自然観察や人間観察から産み出された、ある種の自然誌や人間誌でもありえたことが見逃されてはならない。

事実、あの「春は曙」で始まる『枕草子』の端々には、この頃、多くの人が思いも寄らなかったり、感じ取ってはいても、うまく言い表わすことの出来なかったりした経験が、この一人の女官の緻密な観察と、その実証とによって、ものの見事に表現（expression＝圧出）されているし、そうであるからこそ、この随筆（essay＝試論）は世界に先立って、例えばモンテーニュの『随想録』を凌ぐ、はるか500年以上も昔の、まさしく古典（classic＝最上級）としての位置づけを保っているのでもあった。そして、そうであるからこそ、と繰り返すけれども、このようにして私たちは今も、例えば「遠くて近きもの」の代表に、いわゆる「極楽」や「舟の道」や、あるいは「人の中」を数え上げ、これらを私たち自身の、

みずからの観察と実証とを通じて、それぞれに経験しているのでもあり、その点、私たちと『枕草子』との間に横たわる隔たりは、それが千年紀（ミレニアム）を跨ぎ、超えるものであったにも拘らず、それほど大きくはなかったはずである。

ところが、と以下、再び湯川秀樹の「詩と科学」に戻ると、おそらく現在、このような素朴（ナイーヴ）な自然観察や人間観察を、さしずめ私たちは文学的な、あるいは宗教的な表現としては、これを感受し、評価するに吝（やぶさ）かではないであろうが、それを翻って、いわゆる客観的で合理的な、要は科学的な真理であるのかと訊かれれば、これに首肯するのは容易ではない。そして、その科学的な真理の方は、むしろ「いろんな器械がごちゃごちゃに並んでいる実験室」や「わけの分（わか）らぬ数式がどこまでもつづく書物」の中に、ひそかに隠れ、潜んでいると私たちは考え、有り体に言うと、これを信じているのでもあって、それは言い換えれば、この科学（science＝知識）という特異な、はなはだ特殊な学問体系を私たちが手に入れ、そのことを通じて、私たちは自分自身の目に見え、耳に聞こえる、この感覚界や現象界よりも、反対に目に見えず、耳に聞こえない、その名の通りの可想界の方に、私たちの真理観や価値観は傾いている、と見なさざるをえない。

しかも、その趨勢（すうせい）を私たちは、ある種、安易に「進歩」と呼ぶのでもあるけれども、はたして私たちには、このような事態を一概に、手放しで称賛することが許されるのであろうか。と問い質せば、このような科学が反面、その知識の「出発点」である「自然を見ること聞くこと」から私たちを引き離し、そこに湯川秀樹の言う、詩との共通性や類似性を見出すことが困難になり、ひいては「詩の影も形も見えない」という状況に私たちを至らしめているのであれば、これは相当、重大な局面に私たちが立たされていることにもなりかねないであろう。事実、そのような状況も踏まえて、この「詩と科学」の中で湯川秀樹は、あえて「科学者とはつまり詩を忘れた人である。詩を失った人である」とも述べていた訳であり、そこから彼の持ち出した疑問は、と子供向けの一文でもあるから、そのまま原文どおりに引用しておくが、彼は以下のように書き記していた次第。「そんなら一度うしなった詩はもはや科学の世界にはもどって来ないのだろうか」。

この短文が書かれたのは、前掲のごとく昭和二十一年の、その年末（12月）であったから、この年、湯川秀樹は数えの40歳（すなわち、不惑）に達していたことになるし、それは言うまでもなく、この国の戦後がスタートをして、まだ一年余りの頃でもあれば、この年には年頭、京都帝国大学の、いわゆるサイクロトロン（cyclotron＝加速器）が大阪湾に投棄される出来事から始まって、やがて義兄

（湯川蜻洋）の死の知らせや、また実弟（小川滋樹）の死の知らせが相次いで彼を襲い、この二つの死に差し挟まれる中、彼自身が刊行会の理事長に就任し、理論物理学の欧文専門誌である“Progress of Theoretical Physics”を創刊した年でもあった。ノーベル賞の受賞には、まだ3年ばかりが必要である。なお、この年の前年の暮れ、彼の『深山木』には「昭和二十年も暮れんとして」の詞書と共に彼自身の「自賛歌」（「和歌について」）が収められているので、ご一読を。「雪近き／比叡さゆる日々／寂寥の／きはみにありて／わが道つきず」

この歌が「自賛歌」である理由を、湯川秀樹は次のように論じている。いささか長い引用とはなるが、念のために掲げておく。「初雪が降るのも間もないだろう。空気が澄み切って比叡山がはっきり見え、非常にさびしい感じだけれども、それと同じように、自分の進んでいく学問の道もだんだん険しくなってきて、一緒にやる人も減ってきた。自分一人でやらなきゃならないが、自分の道はまだまだ先があるんだという、この時期の気持ちをよくあらわしているだけでなく、ずっと前後を通じて、私が学問をし続けている気持ちが、この一つの歌に集中的にあらわされているわけです。だから、西行法師じゃないけれども、もしも自賛歌はどれかと言えば、自分ではこの歌だろうと思うんです」。ちなみに、その西行の「自賛歌」とは次の通り。一応、典拠としては『新古今和歌集』（巻第十七、1615）が標準的な形であろう。無論、末尾の「思ひ」は火の掛詞である。「風になびく／富士の煙の／空に消えて／行くへも知らぬ／わが思ひかな」

さて、このようにして科学（science）とは、いわゆる「自然」（nature）を相手にし、そこに「自然」の、まさしく「美」（beauty）である「詩」（poem）を見出すための行為であり、その点、その営（いとな＝暇無）みに即して言えば、科学と文学（literature）とは一卵性双生児のごとき間柄にある、と考えるのが湯川秀樹の立場であろう。したがって、たとい「ごみごみした実験室の片隅」にも、また「しろうと目にはちっとも面白くない数式の中」にも、この「詩」は隠れ、潜んでいるのであり、そうである以上は、もともと「詩と科学とは同じところから出発したばかりでなく、行きつく先も同じなのではなかろうか。そしてそれが遠くはなれているように思われるのは、途中の道筋だけに目をつけるからではなかろうか。どちらの道でも、ずっと先の方までたどって行きさえすれば、だんだん近よってくるのではなかろうか。そればかりではない。二つの道はときどき思いがけなく交差することさえあるのである」と、最後に彼は言う。

ずっと先の方まで。それは一体、どれほど遠方の、はるか彼方にまで達してい

るのであろう。このように問い掛ける時、湯川秀樹の物言いは結果的に、それが子供向けの一文である範囲を超えて、その閾(しきい)を大きく跨いでいる、と私たちは認めざるをえない。そろそろ引用は、この辺りで控えたいが、はたして私たちは、次のような彼の言葉を「幸い」として受け止め、これを慰めと感じうるであろうか。「詩というものは気まぐれなものである。ここにあるだろうと思って一しょうけんめいにさがしても、詩が見つかるとは限らないのである。(中略) すべての科学者がかくされた自然の詩に気がつくとは限らない。科学の奥底にふたたび自然の美を見出すことは、むしろ少数のすぐれた学者にだけ許された特権であるのかも知れない。ただし幸いなことに、一人の人によって見つけられた詩は、いくらでも多くの人にわけることができるのである」。湯川秀樹の詩人論や科学者論が、そのまま「天才」(genius＝守護神) 論でもありえた由縁である。

なお、湯川秀樹の『天才の世界』については、先刻、石川啄木を論じた際、触れておいたが、この著作は元来、昭和四十八年 (1973年) から昭和五十四年 (1979年) に掛けて出版され、続篇、続々篇と連なる「三部作」であり、そこには弘法大師 (すなわち、空海) を筆頭に、順に石川啄木、ゴーゴリ、ニュートン、アインシュタイン、俵屋宗達、尾形光琳、世阿弥、荘子、ウィーナー、エジソンの名が並ぶ。これらの名を一瞥しただけでも、それは壮観この上ないが、このような「天才」たちを通じて、この時期、湯川秀樹の問い掛けていたのが、いわゆる「創造」の問題であって、それは現在、私たちの時代が湯川秀樹に対して抱く、もう一つの主要な関心事でもありえたはずである。そして、そのような「天才」論や「創造」論を射程に収める時、何よりも、その当の湯川秀樹その人が、この「天才」論や「創造」論の当事者でもあれば、文字どおりの主人公 (hero＝半神) でもありえたことに、やはり私たちは気づかざるをえないであろう。

ところで、この後、次節の冒頭 (5：) に表題として掲げておくのは、そのような湯川秀樹が幼少期に暮らした、まず「寺町通、染殿(そめどの)町の家の記憶」を詠んだ歌 (うつらうつら／誰(たれ)の背(せな)ぞも／子守唄(こもりうた)／苔(こけ)むす庭(にわ)の／見(み)ゆる縁側(えんがわ)) であったが、この歌に続いて、彼の歌集の『深山木』には、そこから「河原町通に面する家に住みし少年の日を思ひ出でて」と詞書の付いた、計16首の歌が並び、その次には、さらに「塔之段(とうのだん)に移り住みて」の3首が置かれ、これで彼の「少年の頃」の部立は終わる。冒頭に置かれた、あの「逝く水に」の歌も含めて、計21首となる。幾つか、この場において触れておくべき歌の他は、やがて本稿が彼の家族構成や、その出自を扱う折、あらためて振り返る機会が生じうるであろう。なお、彼が東京で生まれて、京都に移り住むのは、満1歳の時であり、それ以降、この

ようにして転居を繰り返し、上記の「塔之段に移り住みて」とあるのが大正十五年（1926年）のことになる。もちろん、昭和の始まる年であった。

5：うつらうつら誰の背ぞも子守唄苔むす庭の見ゆる縁側

ちなみに、これらの「少年の頃」は後年、とは言っても、それは高々、彼が大学生になったばかりの時分に過ぎないが、要は湯川秀樹が数えの20歳になってから、当時を想い起こし、その幼年期や少年期を回想したものであり、これが彼の記憶の彼方に揺蕩（たゆた）う、その幼年期自体や少年期自体と重なり合うものであるのかどうかは、保証の限りではない。と言うよりも、ここには当時、彼が後述のように物理学を志し、みずからの生涯を物理学者に見定めて以降の、言ってみれば、そこから手繰（たぐ）られた過去の残像（アフター・イメージ）が並べられているのであって、それを虚構ではなかろうかと勘繰（かんぐ）る前に、きわめて彼が意識的な、自覚的なイメージの操（あやつ）り手でもあれば、ある種の物語作者（storyteller）でもありえたことを、ここで私たちは確認しておくべきであろう。論より証拠、そこには先刻の「縁側」や、あるいは「箱庭」を代表例として、やがて将来の量子力学や素粒子物理学や、とりわけ中間子の予言へと至る道筋が、かなり象徴的（シンボリック）に暗示されていた次第。

もう少し、ここで彼の経歴（キャリア）に立ち入っておくと、先刻も述べた通り、彼は東京生まれの、京都育ちである。ただし、その出生地を彼が離れるのは、わずかに満1歳の時であるから、これは詰まる所、彼の記憶の彼方の出来事に位置づけられて然るべきものであろう。とは言っても、そうであるからこそ、むしろ彼の物語作者としての触手（テンタクル）は、この「失われた時」へと延びざるをえないのでもあり、彼が生涯、はなはだ「梅の花」を好み、これを絶えず母の思い出と重ね合わせようとしていたことは、彼の自伝である『旅人』が証し立てている。すなわち、彼は「当時の東京市麻布区市兵衛（あざぶ いちべえ）町に生れた。年ごとに紅梅の美しくにおう家であった。（中略）この高台にあった家を、私は少しも記憶していない。そこに咲いた梅の花の美しさも、母から聞かされて、知っているだけである。しかし、私はいつしか、この梅の花をこよなく美しかったものと、思い込んでしまった。そしてそれは、自分の出生を自ら飾ろうとする無意識の働きでもあったろう」。

事実、彼が生まれたのは明治四十年（1907年）の1月23日であったし、それは「大変に寒い日」でもあったらしいから、その時は「梅のつぼみも、まだ固かったであろう」と『旅人』の回想は続く。そして、その翌年の3月の末、彼は満1歳を過ぎたばかりの頃に東京から京都へと、一家を挙げて移り住むことになったのであるが、この頃、ようやく彼の「記憶の中で一番古いと思われるもの」が姿を見

せ始め、それが結果的に「母の背におぶさっている自分の姿」であったことは興味深い。実は先刻、本節の冒頭に表題として掲げておいたのも、そのような「母の背」（せ→せな→せなか）に連なる歌であったけれども、この歌の「記憶」が一家の移り住んだ、最初の柳風呂町ではなく、その次の染殿町に位置づけられ、もしくは、位置づけ直されることで、この「母の背」は「女中の背中」（『旅人』）へと、さらには「誰の背ぞも」（『深山木』）へと、どんどん抽象化され、その具象度を欠いていくのは、やはり印象的としか言い様がない。

ともあれ、それが「母の背」であれ「女中の背中」であれ、はたまた「誰の背ぞも」と、その対象が定かならざるものに霞み、ぼやけるに伴い、その背後には逆に「汽笛の音や、機関車の蒸気を吹く音」（『旅人』）が聞こえ出し、あるいは「ねむたい子守唄」（同上）が彼の耳を掠め過ぎていくのが、どうやら湯川秀樹の固有の歌境であるらしく、この詠歌の境地は、彼が染殿町から東桜町に移り住んでからも、あの「笙の音」の第一歌（奥庭に／隣りの出窓／すりがらす／人は見えねど／漏るる笙の音）や、その第二歌（隣りすむ／公卿人の吹く／笙の音の／たゆる時なく／暮るる春の日）を通じて引き継がれ、それが今度は、さらに大学生の時分の、文字どおりの「物理学に志して」の連作（計6首）にまで繋がっている点、改めて振り返られて然るべきであろう。なにしろ、この点は後年、例えば昭和三十六年（1961年）の「具象以前」で彼が述べている通り、いわゆる「混沌に目鼻をつけようとする努力」にも等しかったであろうから。

もちろん、この「混沌」という語は遡ると、その淵源は『荘子』（応帝王篇）にまで辿り着くことになるし、その『荘子』自体は「具象以前」と同じ年に、これまた湯川秀樹が『本の中の世界』において、その冒頭に据え置いた、その名の通りの「枕頭の書」（bedside book）の筆頭でもありえたが、このようにして彼が「私の好きな本」の、ただ「自分の好き勝手な感想」を述べているだけのページを開いても、そこには彼と私たちとの間に差し挟まる、はてしない懸隔が姿を見せざるをえない。そして、それは湯川秀樹が小学校に入る前から、いわゆる「四書五経」や司馬遷の『史記』を始めとして、はなはだ正統的な中国の古典の数々に幼少期から接することの出来る、きわめて特権的な教育環境に身を置いていた点に、ほぼ話は収斂するであろうし、ごく有り体に言えば、それは彼が生まれながらにして潤沢な、いわゆる文化資本（cultural capital）の恩恵に与ることの叶う、まさしく伝統の引き継ぎ手であったことにもなりうるであろう。

が、この種の特権（privilege＝私的恩恵）から、必ずしも彼のような「天才」

や、とりわけ「その内面にはだれよりも深い闇を内蔵」し、その「闇」（やみ＝夜見）の深さにおいて、おそらく「天才の中の最も天才である」（梅原猛）と評しうる才能や、その人格（パーソナリティー）は産み出されうるとは限らないし、それは端的に、例外中の例外でもありえたのではなかろうか。その点、この『本の中の世界』で湯川秀樹が明らかにしているごとく、たまたま彼が「四、五年前、素粒子のことを考えている最中に、ふと荘子のことを思い出した」という経験は、その名の通りの特権であったろうし、それが彼の場合には、結果的にヨーロッパで生まれ、ヨーロッパで育まれた、いわゆる西洋科学の思考法を乗り越えるための、きわめて独自（ユニーク）な頭の使い方へと彼を導いたことは特筆に値する。なぜなら、それ（すなわち、老荘思想）は「一種の徹底した合理主義的な考え方であり、独特の自然哲学として、今日でもなお珍重すべきものをふくんでいる」からである。

この辺りの事情を、もう少々、彼の自伝である『旅人』に即して、その中学生時代と高校生時代から振り返っておくと、ここでも彼が『荘子』に縁（ゆかり）の、上記の「混沌」という語を頻りに用いているのは興味深いが、そのような「目鼻のつかない混沌」に「目鼻をつけようとする努力」に際して、もっぱら表立った縁（えにし）として物語られているのは、やはり当時の世界的（と言うよりも、西洋的）な物理学の動向であり、それは彼が第三高等学校の時分から、やがて京都帝国大学に入学するまでの間、例えば「それまでに読んだ、どの小説よりも面白かった」（傍点筆者）と彼の言う、ドイツの物理学者、フリッツ・ライヘ（Fritz Reiche, 1883〜1969）の『量子論』の英訳本（The Quantum Theory）との出会いや、それ以前にも彼が、すでに「量子論の創始者、マックス・プランクにほのかな尊敬の念を抱きはじめていた」ことをも含めて、実際上、彼の関心は徐々に、それとも急速に、どんどん西洋科学の方に傾いていったのは疑いのない事実である。

ただし、この場で若干、補い足しておくべきは、彼が当時の旧制高校において、ご多分に漏れず、この頃の高校生の聖典（バイブル）でもあった、西田幾多郎の『善の研究』の愛読者であったことであろうし、なおかつ彼が、大学生になってからも西田幾多郎の講義（「哲学概論」）の熱心な聴講者であり続けたことであろうが、この二人の関係については、やがて湯川秀樹が『深山木』の中に「鎌倉、姥ヶ谷（うばがやつ）に西田幾多郎先生を訪ふ」歌を3首、遺しているから、ご参考までに。紙幅の都合もあるので、その中から湯川秀樹の素粒子論（ひいては、素領域論）に一番、繋がりのありそうなものを挙げておく。なお、この折、湯川秀樹が西田幾多郎を鎌倉に訪ねたのは、昭和十六年（1941年）の4月に続いて二度目のことであり、今回は昭和十八年（1943年）の3月のことになるが、この時、湯川秀樹の方は数えの37

歳、西田幾多郎の方は数えの74歳で、後者が亡くなるのは、この2年後であった。
「独立の／物と物との／了解は／表現によると／先生は説く」

この間の経緯は、さらに詳しく『旅人』にも述べられており、そこには「ずっと後になってから、私は度々、京都の飛鳥井町や鎌倉の姥ケ谷の先生のお宅に伺うようになった」と記されているから、どうやら大学を卒業してから、いよいよ彼は「先生のファン」になっていった模様であるが、残念ながら、その往き来の詳細は定かではない。ともあれ、このようにして高校生の時も大学生の時も、また、それ以降も変わらず、西田幾多郎は湯川秀樹に対して忘れ難い、ある種の印象（impression＝内圧）を残し続けたのであり、それは湯川秀樹が西田幾多郎の「歩々清風」の書を、いつも眼前に掲げていたこと一つを取っても、はっきり窺える点であるけれども、湯川秀樹に言わせれば、この二人の関係を支えていたのは哲学と物理学との、その親近性にあった。「哲学と理論物理学とは、大昔は一つであった。今では、ずいぶん遠く離れてしまった。しかし西田先生とお話している瞬間だけは、両者の距離が大分近くなっているような感じがした」。

このような二人の関係、と言うよりも、それは湯川秀樹に与えた、西田幾多郎の側の影響関係と言うべきであろうが、この点は従来、多くの湯川秀樹論からは見過ごされ、見逃され勝ちであった視点であり、論点でもあったに違いなく、それは裏を返せば、総じて20世紀の後半の物理学、とりわけ、この国の物理学が陥ってしまった、要は物理学と哲学との、ひいては思想との乖離や背反を語る上で、もう一度、私たちが立ち返るべき点ではなかったであろうか。その意味において、おそらく今でも、例えば高内壮介が『湯川秀樹論』等の中で、あの田辺元と湯川秀樹との「媒介の思想」を比較していた辺りの論稿は、もう一度、読み直されるに値するであろう。ちなみに、その田辺元の『科学概論』や『最近の自然科学』に湯川秀樹が私淑したのは、ちょうど彼が前掲のフリッツ・ライヘやマックス・プランクや、さらにはマックス・ボルンの「新興物理学の熱烈なファン」になる直前の、言ってみれば、その導火線に火の付く頃に当たっている。

6：物みなの底にひとつの法ありと日にけに深く思ひ入りつつ

ついでに、ここでマックス・ボルンのことを少々、付け加えておくと、この物理学者がユダヤ人であるが故に故郷のドイツを追われ、イギリスへと逃れ、ようやく戦後になってから湯川秀樹と同じ「ノーベル賞」を受賞するのは昭和二十九年（1954年）のことである。したがって、この時、厳密に言うと、彼は満72歳の直前であったことになるが、その若き日の『原子力学の諸問題』（Plobleme der

Atomdynamik）を大学入学直後の湯川秀樹が読み、虜（とりこ）になったのは、実は先刻来、論じた通り、この国の年号が大正から昭和へと切り替わった年であり、西暦に直すと1926年のことであったし、この年にはアインシュタインが有名な、あの「神（＝老人）はサイコロを振らない」（der Alte nicht würfelt）という量子力学（Quantenmechanik）への批判を、この物理学者への書簡に認（したた）めていたことも、よく知られた挿話（エピソード）ではあったろう。湯川秀樹の『旅人』には「この時以来、マックス・ボルン先生は、私の最も敬愛する学者の一人になった」とある。

ついでに、と再度、繰り返すのは恐縮千万であるが、ここで今度は、あのアインシュタインのことにも触れておこう。この二人の関係については、例えば金子務の『アインシュタインはなぜアインシュタインになったのか』の中に、そのまま「湯川秀樹とアインシュタイン」という格好の、要領を得た短文が差し挟まれているから、この一文を借り受け、この場で簡単な交通整理を済ませておくと、この両者が26歳と27歳の、ほぼ同じ年齢で、それぞれ「特殊相対性理論」と「中間子理論」を構想し、この「新しい学問領域」の「真の創造者」となったことは周知の事実であろうから、贅言（ぜいげん）は要しまい。が、その折、彼らが共に「真に独創的な理論を構築するにさいして、必要以上の情報の洪水に曝されることなく、根底から思考を練り上げる」ことの叶う状況や、その立場に置かれていた点は見逃されてはならず、それを金子務のように「戦略的高地」と呼べば、まさしく「この二人のケースは創造性を考える上で重要なヒントになる」であろう。

その点、この二人が揃って、いちやく国際的な檜舞台に「まったく無名の学界外縁部（大学とは無縁の役所、ヨーロッパからは海を隔てた極東）にいる青年」として登場したことは、ひょっとすると彼らの類似性や共通性の最たるものであったのかも知れない。この点に関しては、やがて具体的に立ち入ることになるから、今は後回しにするが、要は「一方はベルンのスイス連邦特許局三級技官、他方は新設の大阪大学講師」という肩書が、この際の彼らの身分である。事実、このような二人の、諄いようではあるが、いまだ「まったく無名の学界外縁部にいる青年」を介して、そこから20世紀の「物理学の根幹をなす大動脈」や、その「主要な動脈」は流れ出すに至るのであって、それを金子務は高村光太郎の「道程」の顰（ひそみ）に倣（なら）い、あの「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」というフレーズで敷衍（パラフレーズ）しているのでもあったが、この「道程」という詩には実は、この通常のヴァージョンと並んで、もう一つの長い版もあったので、念のため。

このように書き継ぐと、かなり持って回った、思わせ振りな物言いに過ぎるで

あろうが、この詩を高村光太郎が発表したのは、ちょうど大正三年（1914年）のことであり、そこには当時の鍵語（キーワード）である「自然」も顔を覗かせている。ただし、この時、まだ湯川秀樹は満7歳であり、それは彼が小学生になった、その翌年のことであったけれども、言うまでもなく、この年を私たちは「第一次世界大戦」の勃発の年として記憶している。ちなみに、この時、すでにアインシュタインの方は35歳であり、この年に彼はスイスを去ってベルリンに移り住み、ドイツの名誉市民権を得るに至っているが、ここから彼が「ノーベル賞」を受賞するまでには、さらに8年の歳月が必要であるし、やがて彼の名誉市民権がナチスによって剥奪され、彼がアメリカに亡命（エグザイル）をするのは、それから11年後のことである。私たちの国の年号では、前者が大正十一年（1922年）で、後者は昭和八年（1933年）であり、それぞれ湯川秀樹は、満15歳と満26歳に達している。

ところで、かなり意外な感じはするであろうが、湯川秀樹が20世紀の物理学の第一人者（チャンピオン）である、アインシュタインに興味を持つのは結構、遅く、どうやら高校入学以降のことであったらしい。と言ったのは、ここでも彼が『旅人』の中で回想しているごとく、彼は何と、驚くべきことに大正十一年（1922年）に日本を訪れ、この国の各地を講演して回った、この「ノーベル賞」受賞者に対しては、ほとんど関心を示さなかったばかりか、その講演が「いつ、どこであるかさえ、よく知らなかった」ほどであり、その内の京都講演すら、彼は「聞きに行かなかった」のが実際の所である。とは言っても、この時から17年後、今度は逆に湯川秀樹の方がアメリカのプリンストンにアインシュタインを訪ね、この二人は講演（レクチャー）どころか、はるかに親密な、密接な出会いを果たすのであり、この昭和十四年（1939年）の出会いを起点に、やがて彼は前述の通り、昭和二十三年（1948年）から翌年に掛けて、まさしくアインシュタインの同僚（コリーグ）ともなった次第。

それと、ここから少々、話は横道に逸れるので、ご容赦を願いたいが、前掲の金子務の『アインシュタインはなぜアインシュタインになったのか』の中には、これまた「アインシュタイン・ブームの背景」という一文が含まれていて、この当時、私たちの国で一世を風靡した、いわゆる「大正デモクラシーの位相」と称しうる文化状況や、その文化の同義語（シノニム）に他ならない教養の誕生が物語られている件（くだり）もあって、きわめて示唆に富む。今では、このような状況は到底、私たちの周囲に生じないであろうが、例えばアインシュタインの来日を惹き起こしたのが『改造』という名の、この頃、創刊されて間もない一雑誌であったことは、やはり私たちの記憶に留められて然るべきであろう。もっとも、この雑誌に連載されたのが、例えば大正時代の最大のベスト・セラーである、賀川豊彦の『死線を越えて』

であったり、あるいは志賀直哉の『暗夜行路』や林芙美子の『放浪記』であったりしたことを踏まえれば、この驚きも幾分、鎮静しうるであろうが。

ともあれ、このような一雑誌の売れ行き次第では、この来日の一週間ほど前、実は南シナ海上で「ノーベル賞」の受賞を知ったばかりのアインシュタインが、その名の通りの「衝撃（ショック）」を私たちの国に与え、一大ブームを惹き起こす、そのような未曾有の時代に、すでに私たちの国は、と言うよりも、広く世界全体は巻き込まれていたことになるであろう。そして、それは好くも悪くも、この時代が「第一次世界大戦」を経た、要は世界戦争後（Post-World War）の時代であったからに他ならないが、それにしても、やはりアインシュタインや、それに先立つ、あの第三代ラッセル伯爵、バートランド・ラッセル（Bertrand Russell, 1872〜1970）の来日には目を見張らざるをえないものがあるし、このような招聘（しょうへい）が、どうやら「西田〔幾多郎〕や田辺〔元〕という京都学派の慫慂（しょうよう）と助力で完結した」ものであったらしいことも、私たちは先刻来の湯川秀樹と、この二人の哲学者との交流を含めて、あらためて振り返る必要があるのではなかろうか。

なお、ラッセルの方が「ノーベル賞」を受賞するのは、くだって昭和二十五年（1950年）のことであるから、彼が大正十年（1921年）に私たちの国を訪れてから、すでに30年近くが過ぎた頃になるし、それは湯川秀樹の受賞の翌年の出来事でもあった。無論、彼の場合には肩書も、いちおう哲学者であるから、その受賞対象は文学賞であったが、その受賞理由には「人道主義の理想と思想の自由を擁護し、そのために闘った、数多くの意義深い著作を評価し、これを讃えて」（in recognition of his varied and significant writings in which he champions humanitarian ideals and freedom of thought）とあって、これが5年後、そのまま昭和三十年（1955年）の「ラッセル・アインシュタイン宣言」にまで繋がることは、今の私たちにも見通しが付き易い。もちろん、この宣言（マニフェスト）に署名した、当時の世界を代表する科学者（11人）の一人が湯川秀樹でもあったが、残念ながら、この宣言の発表の直前、アインシュタイン自身は鬼籍の人となっている。

その意味において、あえて付け加えておくけれども、この『改造』の出版元である出版社（すなわち、改造社）からは、実は世界に先駆けて『アインシュタイン全集』まで企画され、刊行されたのであって、それがアインシュタインの来日の翌年に起こった、あの「関東大震災」によって中断し、最終的には中絶したとしても、その意義自体が損なわれるものではない。また、この際の『アインシュタイン全集』を企画し、当時の表記では『アインスタイン全集』を中心になって

編集し、翻訳したのは、すでに本稿の冒頭にも名を挙げておいた、物理学者の石原純であり、彼には同時に、この改造社から『アインスタインと相対性原理』が逸早く、アインシュタインの来日の前年には出版されているし、この年にも『相対性理論の諸断面（第1輯・第2輯)』が相次いで上梓され、さらに彼が務めた、この折のアインシュタインの日本講演の通訳の成果は、そのまま『アインスタイン教授講演録』として、この翌年に同社から刊行されたのでもあった。

石原純については、彼が湯川秀樹と並んで、むしろ先立って、あの「短歌を詠む科学者たち」の一人であった分、なおさら湯川秀樹との繋がりを論じたい思いに駆られるのは、致し方のない仕儀であるが、これは取らぬ狸の皮算用ではあっても、その成果は後日を期することにしたい。なお、石原純が生まれたのは明治十四年（1881年）であったから、湯川秀樹との間には一世代に近い開きがあるが、その点、逆に彼が石川啄木と、そのまま同世代であることは注目されてよく、後年の彼が石川啄木ばりの分書（わかちがき）や、句読点を用いた「新短歌」の創作に励んでいたことは、この場において想い起こしておくべき点であろうし、彼の最初の歌集である『靉日（あいじつ）』が出版されるのも、ちょうど石川啄木の『一握の砂』から数えて12年後の、この年のことであった。そして、この時、石川啄木の逝去からは10年を経ていた訳でもあるが、もう一方の湯川秀樹は数えの16歳に過ぎず、いまだ彼が京都府立第一中学校の最終学年を迎えていた時分の話である。

7：二人きて傘ひとつ借りて出でてみる海辺の宿の花の雨かな

ちなみに、石原純がアインシュタインに注目したのは湯川秀樹よりも、ずっと早く、と言い出すと、これは余りにも当然、至極の事態ではあろうが、要は石原純の場合には、いまだ世界中にアインシュタインの業績が認知されていない頃に、はるかに先んじて、これを評価し、理解していた日本人の、一人目か二人目に数えられるべき秀俊である。と言ったのは、その一人目には、その兄の桑木厳翼も、その子の桑木勉も、それぞれ哲学者として知られている、当時の九州帝国大学の教授であり、日本科学史学会の初代会長ともなる、桑木彧雄が挙げられるからである。この点に関しても、やはり金子務が『アインシュタイン・ショック』の中に、幾つか興味深い節を差し挟んでおり、例えば石原純の「新短歌運動」が、その「相対論や量子論の根本問題に果敢に取り組んだ科学評論活動の高まりとまさに軌を一にしていくのは、単なる偶然の一致として見逃すわけにはいかない」という指摘は、まさしく本稿の、湯川秀樹論の趣旨とも同一であろう。

その繋がりに即して、もう少々、湯川秀樹と石原純の類似性、もしくは共通性

に言及しておくと、むしろ後者の場合には前者と違って、その不幸な、と評しても構うまい、あの原阿佐緒との醜聞（スキャンダル）が浮かび上がってこざるをえないし、この女流歌人との不倫騒動や恋愛事件が発端となって、彼の地位は急転直下、東北帝国大学の教授から在野の一物理学者、と言うよりも、いわゆる「科学ジャーナリスト」と今日、私たちの呼んでいる職業（vocation＝召命）の草分けへと、彼を転身させてしまったことは周知の通りである。しかも、それは折しも、アインシュタインの来日の前年の出来事であったから、そのことが一段と、のっぴきならない立場に彼を追い込むことにもなったのであるが、それは見方を変えれば、むしろ彼が逆に「大正デモクラシーの位相」の中で、その大衆（demos）の多くが文化や教養や、その中でも、とりわけ最先端の流行である科学を求め出した時代の、これまた最先端へと、彼を連れ出すことにも通じていたのである。

ジャーナリストと言うと、その一番、妥当な定義は、おそらくジャーナリズムに所属し、これに従事している人間を指し示すことであろうが、そもそもジャーナリスト（journalist）にしても、ジャーナリズム（journalism）にしても、その語義は「ジャーナル」（journal）に由来している訳であるから、これが新聞や雑誌や、あるいはテレビやラジオの報道（ニュース）を意味するよりも、ずっと早くから、この語は元来、日記（diarium→diary）を意味する語であった。すなわち、このようにして日々の、まさしくデイリー（daily）な、毎日の出来事を記録に留め、そこから私たちが過去のことを振り返ったり、未来のことを慮（おもんぱか＝思量）ったりするのが、まずもって「ジャーナル」の役目であり、その機能でもあって、その点、さしあたりジャーナリストやジャーナリズムの存在理由（レーゾン・デートル）とは、この現在を起点とし、そこから過去や未来のことを定位するための、それは歴史（history＝探求）と、ほとんど変わらない行為でもあったことになる。

したがって、そのような日記から日刊（デイリー）の、その名の通りの新聞へと、ひいては週刊（ウィークリー）の、さらには月刊（マンスリー）の、これまた新聞や雑誌（magazine＝倉庫）へと、その「ジャーナル」の形態が多様化をし、そのために費やされる時間も、どんどん短縮化をしていく時代には、当然、その時代の社会や文化の動向が背景となり、前提となっている。もちろん、その最たるものは技術の進歩であるが、そのような技術を産み出し、これを広めたり、受け容れたりする側に備わらざるをえないのは、詰まる所、人間の好奇心（curiosity＝知識欲）以外の何物でもなく、それが当時、この国の場合には「大正デモクラシー」という名で呼ばれ、その「モダニズム」（modernism＝近代主義）の花を咲かせていた次第。その意味において、実は石原純も湯川秀樹も、あるいは寺田寅彦も中谷宇吉郎も、その「モダニズム」の時

代に生まれ合わせた点では同じであるし、その証拠には、彼らは生涯、一面では「ジャーナル」の編集者でもあり、啓蒙家でもあったのである。

なお、このような「ジャーナル」の魁（さきがけ）には、例えば明治六年（1873年）に結成された「明六社」の、その機関紙（organ＝道具箱）である『明六雑誌』や、あるいは、その10年ほど後になって、今度は明治十七年（1884年）に設立された「哲学会」の、これまた機関紙である『哲学雑誌』が想い起こされるが、このような啓蒙雑誌や学術雑誌と、ほぼ同時に、あの尾崎紅葉や山田美妙の『我楽多（がらくた）文庫』も明治十八年（1885年）には創刊されているし、これに遅れること、わずか4年後の明治二十二年（1889年）には、森鷗外の主宰した『しがらみ草紙』も刊行されているから、このような文学雑誌に比べても、はるかに科学雑誌のスタートを切る時期は遅く、それは結果的に、この「科学」という語が英語の「サイエンス」（science）の翻訳語として定着するに至る、どうやら明治時代の末年を俟たなくてはならなかった模様である。その限りにおいて、端的に科学雑誌の誕生は「大正モダニズム」の産物でもあった次第。

それならば、そのような科学雑誌が誕生し、例えば、あの誠文堂新光社の『科学画報』や『子供の科学』や『学生の科学』が創刊されてから、ほぼ100年後を私たちは生きている訳であり、その点、湯川秀樹や石原純の生きていた時代と、今の私たちとの隔たりは、それほど大きくはなく、むしろ近い、と評するべきではなかろうか。また、このような科学雑誌と連動する形で「ノーベル賞」が制定され、そこからアインシュタインを始めとする煌びやかなスターが姿を見せ、彼らが世間の耳目を引き、その瞠目を集め出すのは、まさしく20世紀の幕開（オープニング）きと共に起こった現象であり、それは高々、今から120年前の出来事に過ぎない。もちろん、その受賞者の中の一人でもあれば、この国で最初の受賞者ともなったのが、ほかならぬ湯川秀樹であったけれども、もう一方の石原純の場合は悲痛にも、その受賞を遡る4年前に交通事故に遭い、片腕を失い、記憶も無くし、とうとう昭和二十二年（1947年）の初頭、入院生活の果てに帰らぬ人となる。

享年、満66歳。このようにして振り返ると、なるほど湯川秀樹と石原純との間には、大きな境遇の差があるし、そこに私たちは、たやすく幸福と不幸との、あるいは成功と失敗との、はっきりした仕切り線をも引き易い。が、そのような見方は昭和三十六年（1961年）の、すでに触れた「具象以前」の中で、いかにも切々と湯川秀樹が述べていた通り、あくまで一人の物理学者の、と言うよりも、それは一人の人間の「努力」や「苦労」を抜きにして、それぞれの人間を私たち

が「外から見た時の、やや離れて見た時の評価」に過ぎず、それだけでは人間の評価は不充分であり、不可能である、と主張するのが湯川秀樹の立場でもあった。なにしろ、そもそも人間には「機械」や、その「機械」を通じて私たちの周囲に、さながら洪水のごとく押し寄せては、たちまち流れ過ぎていく、夥しい数の「情報」のように、あらかじめ「具象化」をされている記号や、その組み合わせとは違う、むしろ「具象以前の世界」が内包されているのであるから。

そして、そのような「具象以前の世界」から、人間が「何か具体化されたものを取り出そうとする」点において、等しく「科学も芸術もそういう努力のあらわれである」と湯川秀樹は言う。ここまで来ると、あの「詩と科学」の中で若い日の彼が「こどもたちのために」述べていたことと、まったく同じ主張が繰り返されていることに私たちは気づくことになるであろうが、このような主張は実は、すでに湯川秀樹に先立ち、ほとんど似た言い回しを使い、石原純が以下のように表現していたものでもあったのである。昭和十六年（1941年）の『科学』の巻頭言である「科学と芸術」から引いておこう。「科学と芸術とが著しく隔たつてゐるやうに考へるのは、それは科学をも、また芸術をも本当に理解してゐない人々の、まるで表面的な見方に外ならないのである。科学にしても、芸術にしても、それの真実の機微は自然や、ないしは人生の内奥に深く触れることであつて、これを逸しては科学も芸術もその本当の意味を失つてしまふのである」。

ところで、先刻、前節の冒頭（6：）に表題として掲げておいたのは、ふたたび湯川秀樹の『深山木』の中の「籠居（こもりゐ）」の部立において、その最初に「物理学に志して」の詞書を伴い、並べられている6首の内の、その第1首（物（もの）みなの／底（そこ）にひとつの／法（のり）ありと／日（ひ）にけに深（ふか）く／思（おも）ひ入（い）りつつ）であったが、この歌が詠まれた時期は正確には分からない。ただし、それが彼の高校入学以降、ひょっとするとアインシュタインの来日を契機として、その前年あたりから、少しずつ彼の中に兆し、言ってみれば、この頃の彼を「取りまいている氷に、目に見えぬひびを入らせた」（『旅人』）であろう、この偶発事（ハプニング）を切っ掛けに、彼が次第に物理学に興味を持ち、この学問に熱中していく時期から、その後に続く、彼が大学生であった時分に詠まれた歌と思（おぼ）しい。なお、すでに触れた通り、湯川秀樹が京都帝国大学の理学部物理学科に入学するのは、大正十五年（1926年）の春であり、卒業するのは、それから3年後の昭和四年（1929年）の春である。

無論、計算間違いではない。そこで簡単に、ここで湯川秀樹の経歴の内、その学歴（スクール・キャリア）に関して述べておくと、まず彼が大正二年（1913年）に京都市立京極尋

常小学校（現：京極小学校）に入学するのは満6歳の時であり、さらに続いて、彼は大正八年（1919年）に京都府立第一中学校（現：洛北高等学校）に入学している。この折が、早生まれであった彼の場合は満12歳に当たる。そして、そこから既述のごとく、彼は大正十二年（1923年）に第三高等学校（理科甲類）に満16歳で入学することになる訳であるが、この時点で現在の私たちとの間には若干、年齢差が生じたことになる。当時の中学校（すなわち、旧制中学校）の修業年限は5年であったが、これを彼は4年で終えて、いわゆる「四修制度」の進学コースを選び取ったからである。また、その上に当時の大学の卒業年次は3年であったので、要するに彼が京都帝国大学に入学したのは大正十五年で、これを卒業したのは昭和四年の、今の私たちと違わない、満22歳の時であった。

8：いにしよの人も聞きけん後の世の人も聞くらん潮さゐの音

一応、ここまでが彼の学歴である。一応と言ったのは、この後、湯川秀樹は大学を卒業し、大学院には進学せず、そのまま京都帝国大学に副手として残ることになるのであるけれども、この職務は当時、旧制大学における助手の、もう一段、下位に位置づけられており、言ってみれば助手の、さらに助手の役目をも引き受けていたことになるが、その立場は何と、無給であった。すなわち、このようして教員とも学生とも、ほとんど見分けの付かない身分で、湯川秀樹の研究者生活はスタートを切ったことになる。事実、この状況を『旅人』の「転機」の章から補い足しておくと、次の通り。「私たち三人は無給の副手という資格で、学生時代と同じように勉強を続けた。当時、世の中は不景気で、大学卒業生の売れ行きは悪かった。そんなことも手伝って、私の同級生には、大学に残る人が多かった。〔中略〕私はあいかわらず丸刈りであった。母は背広を新調してくれた。それも滅多に着なかった。詰えりの学生服で、毎日、研究室に通った」。

なお、この場に湯川秀樹を含めて「私たち三人」とあるのは、すでに本稿の冒頭から、ご登場を願っている朝永振一郎と、もう一人は、やがて母校である第三高等学校の教授となり、戦後は京都大学（教養部）の教授となった、多田政忠である。三人とも、要は「一中」と「三高」を通じての「同級生」であったから、旧知の顔ぶれでもあったが、この三人が大学生の頃と同様、揃って机を並べたのは、この頃の京都帝国大学の理論物理学の教授、玉城嘉十郎の研究室であって、この研究室で3年間、湯川秀樹は彼の言う、その「学究生活全体」の「非常に貴重な準備時代」を過ごし、やがて昭和十三年（1938年）に玉城嘉十郎が急逝を遂げた翌年に、その後任となって母校へと戻り、その教授となった次第。以下、彼の『深山木』には「昭和十三年六月」と日付の付いた、その「玉城嘉十郎先生を

追慕して」と題された歌も遺されているから、この場において挙げておく。「濃(こ)きあさき／青葉(あをば)がくれの／山々(やまやま)を／見(み)つつし人(ひと)を／なつかしむかな」

さて、このようにして書き継ぐと、ここで漸く前節の冒頭（7：）に掲げておいた、あの「二人きて」の一首が、その脈絡(コンテクスト)を手に入れることになるのであるが、この歌は『深山木』のページを捲ると、そこに突然、唐突とも言うべき形で、まず「新婚の旅に新和歌浦にきて」という詞書が置かれ、その後には「昭和七年四月」という日付を伴って、前掲の一首が収められている。いささか細かい注釈を添えておくと、この時、彼が新婦（湯川スミ）と共に「新婚の旅」に赴いたのは、当時、驚くべきことに年間100万人もの観光客の訪れていた、和歌山の「新和歌浦」である。したがって、その夥しい観光客の中の100万分の1（と言うよりも、100万分の2）となったのが、この時、新たに小川秀樹から湯川秀樹へと名を改めた、この物理学者でもあった訳であるが、実は先刻来、述べておいた通り、彼が不安定な身分を免れ、学生の立場から教員の立場へと身を転じ、正式に京都帝国大学の講師となるのは、この新婚旅行(ハネムーン)の直後のことであった。

この間の事情について、もう暫く、今度は彼の自伝（『旅人』）の引用を続けると、この時、彼が新婚旅行先に和歌山を選んだのは、そこに彼の養父である湯川玄洋が、大阪から転地療養に赴いていたからに他ならず、その定宿(じょうやど)であった「望海楼(ぼうかいろう)」を、この時、湯川秀樹となったばかりの小川秀樹は、はじめて訪ねることになった。とは言っても、それは湯川秀樹の記しているごとく、大阪から和歌山への、わずか一日の「新婚の旅」に過ぎず、この、むしろ「遠足」とも呼ぶべき旅行の後で、とんぼ返りをした彼を待ち受けていたのは、要するに、はじめて彼が大学の教壇に立ち、そこで「量子力学」（quantum mechanics）の講義をし、その名前すら、いまだ小川秀樹なのか湯川秀樹なのか、その受講者には詳らかならざる折の、はじめての授業であった。そして、その受講者の中から、やがて彼の「協力者」ともなる、坂田昌一や小林稔や、あるいは武谷三男が巣立つことになるのであるから、これは何とも壮観な、信じ難い授業風景である。

ところで、この際に序(ついで)に、と言うと語弊はあるが、このようにして湯川秀樹の結婚について話が及ぶと、いつも取り上げられることになる話題であるから、その意味において、あくまで次第(つぎて)の話題ではあるけれども、もともと湯川秀樹は先刻来、言葉の端々に上せている通り、その本名は小川秀樹であり、そこから結婚後、湯川家の婿養子となり、その姓を小川から湯川へと改めるのが順序である。であるから、この折に彼の養父となったのが湯川玄洋であるし、その次女の澄子

（スミ）が、彼の新婦となった女性に他ならない。なお、この頃、湯川家は大阪の内淡路町にあり、ここから湯川秀樹は京都帝国大学に通い、その翌年には大阪帝国大学の講師となって、いかにも順風満帆な、と傍目には見えるであろう、その生涯の「最も苦しい二年間」を過ごすことにもなるが、彼曰く、それは「重い荷を背負った旅人が、上り坂にさしかかったようなもの」であり、その「苦しいということそれ自体が、同時に楽しいことでもあった時期」であった由。

ちなみに、ここで再度、彼の歌集の『深山木』を繙くと、そこには彼が新婚生活をスタートさせた、この大阪の内淡路町と、そこから引越しをして移り住むことになった、西宮の「苦楽園」で詠まれた歌が幾つか、差し挟まれているけれども、それらが「籠居」の表題の下に置かれていたのは感慨深い。そして、その表題どおりの「籠居」の歌（時おりに／ばさと音する／そのほかは／いや静かなる／雪の籠居）と並んで、もう一首、彼が養父の「永眠」に際して詠んだ歌（真柏の／残るさにはべ／年ごとに／をとめつばきの／花は咲けども）が含まれているから、ご参考までに。なお、この際の「真柏」（＝槇柏）は「深山柏槇」の別名であって、とかく日本人には盆栽として名高いが、それを「斎場」の「乙女椿」と重ね合わせた所に、この歌の弔意は込められているであろうし、このようにして湯川秀樹が新婚旅行で「新和歌浦」を訪ねてから、わずかに3年後、昭和十年（1935年）の夏、湯川玄洋は不帰の客となった。享年、数えの69歳。

湯川秀樹の養父である玄洋について、もう少々、話を繋ごう。生年は慶應三年（1867年）で、没年は先刻も述べた通り、昭和が始まってから十年後である。生まれたのも、亡くなったのも、どちらも夏。死因は「心臓麻痺」と、ふたたび湯川秀樹の回想録には記されているが、こちらは『旅人』からの引用ではなく、それに先立って、昭和十七年（1942年）に彼の書いた「二人の父」という一文が典拠である。言うまでもなく、この一文に「二人の父」というタイトルが宛がわれているのは、彼が結果的に実父（father by blood）と養父（father in law）の「二人の父」を持ち、小川姓から湯川姓へと、その姓（family name＝家名）を改めた人であったからに他ならないが、この内の実父（小川琢治）に関しては、あらためて言及し直したいので、今は措く。なお、この「二人の父」は湯川秀樹が、その養父である玄洋に続き、この時、ちょうど「没後一年」を迎えようとする、この実父の逝去を振り返り、その生涯を跡づけたものでもあった。

ところで、この「二人の父」にも触れられている点ではあるが、ほぼ現在、湯川玄洋が話題に上る折、絶えず引き合いに出されるのは夏目漱石の『行人』であ

り、そこには湯川玄洋をモデルとする、あの「黒のモーニングを着て（中略）色の浅黒い鼻筋の通つた立派な男」の姿が描き出されている。この「男」は、あくまで物語上は主人公（長野二郎）が、その入院中の友人（三沢）を大阪の病院に見舞った際、そこで出くわした、要は「院長」に過ぎないのであるが、この小説が夏目漱石の、そのまま実体験に基づいて書かれている面があったことから、この「院長」は湯川玄洋のイメージと重ね合わせて、とかく取沙汰されることが多い。この小説は、この国の年号が明治（四十五年）から大正（元年）へと、切り替わる年に始まっているけれども、実際に夏目漱石が持病の胃潰瘍を再発させ、当時、関西で最初の胃腸病院として名を馳せていた、この「大阪胃腸病院」に担ぎ込まれるのは、この前年の明治四十四年（1911年）のことである。

この経緯にも、いろいろ興味深い逸話が遺されてはいるが、かなり煩瑣に亘るので、この場は省く。確認しておきたいのは、この時、夏目漱石が前年の「修善寺の大患」の後、療養を兼ねて関西を訪れた際、明石から和歌山へと、堺から大阪へと、その講演旅行を続ける中で、とりわけ白眉の講演とされる「現代日本の開化」は和歌山で催されたものであること、そして、その折の宿泊先である「望海楼」において、彼が「不養生」とも見える「飯蛸」（夏目鏡子『漱石の思ひ出』）に舌鼓を打ったこと、このような事態が積み重なり、彼と湯川玄洋との遭遇は可能になった次第。なお、この「望海楼」は湯川玄洋が定宿としたり、そこに結婚後、間も無い湯川秀樹がハネムーンに訪れたりもした、あの「新和歌浦」の「望海楼」とは別物であったから、念のため。こちらは『行人』にも、あるいは「現代日本の開化」にも、どちらにも「東洋第一エレゴーター」と共に登場する、言ってみれば、旧和歌浦（＝和歌浦）の「望海楼」の方である。

実際、湯川秀樹の『深山木』にも、前掲の「新婚の旅に新和歌浦にきて」の歌（二人きて／傘ひとつ借りて／出でてみる／海辺の宿の／花の雨かな）の後、今度は昭和十六年（1941年）になって、彼が「ふたたび新和歌浦を訪れて」詠んだ、計7首の歌が収められているが、そこには先刻、本節の冒頭（8：）に掲げておいた歌（いにしよの／人も聞きけん／後の世の／人も聞くらん／潮さゐの音）の直前に、これまた今は亡き、湯川玄洋を偲ぶ、その名の通りの「父」の歌が含まれているから、ご一読を。この歌を踏まえれば、もとより「いにしよ」とは往（＝去）にし世（＝代）であり、その時間の射程は遠く、はるか『万葉集』の昔の、あの山部赤人の歌（若の浦に／潮満ち来れば／潟を無み／葦辺を指して／鶴鳴き渡る）にまで辿り着くのであろうが、この時、その「いにしよ」の側に確実に、彼の「父」である湯川玄洋の姿が嵌め込まれていたのも疑いはない。「父います

／窓辺にみえし／蓬莱の／岩は年へて／かはらぬものを」

9：紀の国の海辺の家の石垣のひともとの松やがて見えくる

話は些事に及ぶが、この「蓬莱岩」は今でも、その名の通りに「新和歌浦」の、いわゆる景勝地（picturesque place）の一つに数えられており、それは湯川秀樹が今から80年も90年も昔に目にしたのと、ほとんど変わらないであろう、絵葉書（picture postcard）のような姿を海に突き出し、佇んでいる。が、言うまでもなく、このような目線を私たちが獲得するのは、あくまで私たちが観光客（tourist）として、その立ち居、振る舞いに違和感を抱かなくなることが条件である。その点、そもそも絵葉書が私たちの国に輸入され、やがて日本各地に、さまざまな観光用の絵葉書が出回り出すのは、結果的に明治三十三年（1900年）以降、この国で私製葉書の発行が認可をされてからのことに過ぎないし、その繋がりに即して言えば、ちょうど夏目漱石が和歌山の和歌浦を訪れたのは、この場所が森田庄兵衛によって「新和歌浦」という形で観光地化をされる、その最初の年に当たっていたことも、やはり記憶に留められて然るべきであろう。

とは言っても、このような「まなざし」（gaze＝凝視）を偏に、もっぱら昨今の私たちに特有の、特定の生活圏の中で捉え過ぎると、そこに思わぬ落とし穴が待ち構えていることも見逃されてはならず、やはり私たちは湯川秀樹の生年が、いまだ大正への改元を経る前の、明治四十年であったことを忘れるべきではないし、これを安易に西暦に置き換えて、彼が20世紀の人間であったことばかりを強調するのは、いたって片手落ちではあるまいか。いわんや、それが彼の養父ともなった湯川玄洋であれば、その生年は慶應の末年であり、それは江戸から明治への帳が切って落とされる前の、少なくとも「紀州」が舞台であったことが前提となるであろう。と切り出すと、この養父も養母も、それどころか実は、さらに実父も実母も共に、ことごとく湯川秀樹のルーツは「紀州」に発していることが分かるし、それは彼にとって、あたかも水が、そこから湧き起こる、源（みなもと＝水本）のごときものであり、水源であったと評さざるをえない。

この点に関して、ふたたび「二人の父」からの引用を続けると、いかにも興味深いのは、この養父の下で高々、と言うと語弊はあるが、わずか3年の歳月を共有したに過ぎず、しかも、その立場は婿養子であった湯川秀樹が、この「三年」のことを「何だか長い長い年月のような気がする」と振り返っていることである。この感慨は、さらに『深山木』の中の「籠居」において、その「大阪、内淡路町の家にて」の3首にも、かなり印象的な形で留められている。そして、そこには

夕暮が来て、ふと飛び込んだ「蝙蝠」（かはほり→コウモリ）の歌（夕されば／横堀にとぶ／蝙蝠の／一つ窓より／入りてはばたく）から始まって、その夕暮に急いで帰宅した彼の目に映る、じっと座り続けている「ちち」の歌（夕暮を／せきかへりつつ／ちちのみは／同じところに／座りゐたまふ）と、その「大阪の家」に堆積する、曰く言い難い「木の香」を「なつかしむ」歌（大阪の／家にかへりて／なつかしむ／暗き廊下に／こもる木の香を）が並べられている。

時間が往ったり、来たりして恐縮ではあるが、ここで少々、湯川秀樹の居住地を振り返っておくと、この大阪の内淡路町に、彼が結婚を機に京都から移り住むのは、すでに述べたように昭和七年（1932年）である。そして、その翌年に湯川家は、これまた先刻、触れた通り、あの「苦楽園に新しく建った家」に引越しをし、そこから去るのは昭和十五年（1940年）のことになるが、この際の引越しの理由の最たるものに、養父である湯川玄洋の「健康」があったことは『旅人』に詳しい。また、この「苦楽園」は同書の最後の章題ともなっているし、この名に因んだ、彼の妻の回想録（『苦楽の園』）も遺されているから、この家が一人、湯川秀樹のみならず、総じて湯川家にとっては「忘れることのできない、思い出の家となった」ことは間違いがない。すなわち、それは養父の死と、それに先立つ長男（春洋）の誕生と、これに続く次男（高秋）の誕生と、言ってみれば、そのような生と死とが、春と秋とが行き交う場所が、この家であった。

もちろん、そこには湯川秀樹が、この家で次男の生まれた直後、例の「室戸台風」の被害も収まらぬ内に、はじめて「中間子」の存在に気づいた、その「ある晩」の「思い出」が刻み込まれている。そして、この発見（discovery＝除覆）の興奮も覚めやらぬ渦中で、彼の『旅人』は一応の、その到着点（destination＝予定地）を見出すことになるのであるけれども、それが彼の自伝としては最後の、いわゆる大団円を迎えた訳ではなく、いかにも旅の中途で、この「坂路を上ってきた旅人」が、その旅の一里塚にしか過ぎないであろう、その名の通りの「峠の茶屋」での「一休み」をしている所で、俄に閉じられてしまったのは周知の通りである。しかも、この自伝の末尾には曰く有り気な、次の言い回しが掲げられていたのであるから、それは読者にすれば、この続きを是が非でも読みたくなる、はなはだ罪作りな誘因であったことにもなりうるであろう。「この時、私は前途にまだまだ山があるかどうかを、しばし考えずにいたのである」。

ともあれ、このようにして湯川秀樹の、昭和八年から昭和十五年に及ぶ、足掛け8年の「苦楽園」の生活は、やがて次の段階を迎えることになるのであるが、

この点については『深山木』の中に、前掲の「西宮市苦楽園の丘の家にて」の2首と共に、その「苦楽園を去らんとして」詠まれた、彼の別れの歌（裏庭の／石垣の蔦／いろふかみ／山の家居を／去りがてにする）も遺されているので、ご参考までに。以下、彼の歌集に並んでいるのは、この次に居を定めた「甲子園の仮寓の内外を詠める」歌から始まって、その「甲子園を去らんとして」詠まれた、昭和十八年（1943年）の歌までが、要は一括りの、一続きの歌群を形成していた訳でもあるが、その多くは戦火の中、彼が日本各地の、さまざまな場所を訪れた折の、その旅の歌によって占められることになる。そして、そこに含まれていたのが、実は先刻来、取り上げてきた、あの「ふたたび新和歌浦を訪れて」の7首でもあれば、それは次の「紀州日高郡比井崎村」の4首でもあった。

日高郡比井崎村は、もう今では存在していない村であり、いわゆる歴史的行政区域に当たる。この村が存在していたのは、この国に市制と並んで町村制の施行された、もう今から130年余りも昔の、明治二十二年（1889年）以降のことであり、それが60年近くの時を経て、戦後になってから、今度は昭和二十二年（1947年）に地方自治法が成立し、この比井崎村は結果的に、やがて近隣の内原村と志賀村と合併をし、現在の日高町となる。これが昭和二十九年（1954年）の出来事である。したがって、この「紀の国の海辺の家」の歌が詠まれた時、確かに「比井崎村は安珍・清姫の伝説に名高い道成寺のある日高川下流から少し西北の海浜にある」村であり、この土地で代々、湯川家は「医を業としていた」家でもあれば、そこは「比井湾に臨んで眺めはよい」と、ふたたび湯川秀樹の「二人の父」には記されている。その家を、事細かな日付は不明であるが、どうやら湯川秀樹が訪ねるのは昭和十六年（1941年）の冬のことのようである。

と言ったのは、この歌に先立ち、彼は鹿児島から新潟へと、北海道から和歌山へと、いかにも慌しい、その名の通りの「車窓」の人となっており、この年の秋は奈良へも足を延ばし、そこで唐招提寺の「秋風」の歌と薬師寺の「秋の夕日」の歌を詠んだ後に、この「紀州日高郡比井崎村」の4首が『深山木』には配されていたからである。なお、ごく当たり前のことではあるけれども、この旅は「車窓旅情」の詞書のごとく、主として汽車や、あるいは電車や自動車を介しての旅であり、やがて日本人が飛行機に乗って、ごく普通に空の旅を楽しむためには、そこに戦禍の時代が介在せざるをえない。しかも、その時代が「空の帝国アメリカの20世紀」（生井英考）を象徴するものであった以上、この時代の到来が決して湯川秀樹と無縁のものではないことも、この場で私たちは再認識をしておくべきであろうし、その点、この年の12月8日はアメリカと日本との間に、いわゆる

「太平洋戦争」の勃発した年であることも、やはり記憶に留めたい。

ちなみに、この「紀州日高郡比井崎村」の4首が、やや想像を逞しくすれば、この時、その「太平洋戦争」（Pacific War）の、あるいは当時の日本側の呼称で言えば「大東亜戦争」の、その開戦前の歌であったのか、それとも開戦後の歌であったのか、気に掛かる所ではあるが、気に掛かると言い出したら、それは同じく和歌山の、こちらは市制が敷かれる直前の西牟婁郡田辺町で、この年の暮（12月29日）になって、あの南方熊楠が湯川秀樹と同じく、満74歳の生涯を閉じている点も想い起こされよう。田辺市が発足するのは、この翌年、昭和十七年（1942年）のことであるけれども、その田辺市から北に向かって、この頃の呼び名で言えば、南部町、印南町、御坊町と、海岸線を辿った先に姿を見せるのが日高郡比井崎村である。そして、そこで「紀の国の／海辺の家の／石垣の／ひともとの松／やがて見えくる」と湯川秀樹が詠んだのは、その「松」に似つかわしく、ひょっとすると、この翌年の年始の出来事であったのかも知れない。

さて、このようにして振り返ると、奇しくも湯川秀樹の養父、玄洋と夏目漱石の生年は、まったく同年であったことにも気づかされうるが、その一方で慶應三年（1867年）の「紀州」に産声を上げたのは、これまた夏目漱石とは奇妙な、奇縁で結ばれている、上記の南方熊楠であるし、そこから3年を手繰り寄せれば、今度は明治三年（1870年）に生まれ合わせた、小川琢治と西田幾多郎の名が浮かび上がってくる。彼らのことを、これまで本稿の使ってきた言い回しを用いて、ふたたび思想家や教養人と称しておくと、そもそも彼らの思想や教養の独自性となり、その共通性ともなったのは、詰まる所、彼らの「知性」が「西欧風の合理主義内の安居に満足せず、中国や日本に育った気品のある感性との協力を重んじるものであった」ことに辿り着くのではあるまいか。なお、この一文は桑原武夫を中心にして、かつて湯川秀樹の追悼文集（『湯川秀樹』）が編まれた折に、この「賢人」の「知性」を桑原武夫が特徴づけたものであった次第。

10：父母のめぐみも深きこの国の山の蜜柑の黄ばむ頃かな

湯川秀樹について、あれこれ書き留めておきたいことがあるので、この場を借りて筆を執る。と、このように筆を執り始めてから、とうとう原稿用紙（400字詰）換算で、もう90枚の長丁場に達している。その上に、なおかつ話は一向に収束し、終息する気配を見せず、このまま放っておくと、おそらく話は湯川秀樹好みの、いわゆる「混沌」の状態に留まり兼ねない有り様である。が、それはそれで「湯川秀樹論」らしく、あえて「混沌に目鼻をつけようとする努力」は、しな

いに越したことはないのではなかろうか、と強弁するのは容易であるけれども、やはり何事にもケジメは必要であろうから、そろそろ筆の擱き具合を工夫するべき潮時ではあろう。そこで本稿は、以下、これまで述べてきたことを踏まえ、述べ切れなかった点や述べ足りなかった点も含めて、上記の一書で桑原武夫が「湯川秀樹の全存在に迫る精密な評伝は必ず書かれねばならない」と訴えた、その来(きた)るべき「評伝」のための、細(ささ)やかな補助線を引くことに努めたい。

まず、その「混沌」に関して。この語は前述の通り、もともと『荘子』(内篇)の最後(応帝王篇)の、その又、最後に置かれている寓話に登場し、この書物全体の結論とも見なしうるが、言うまでもなく、この語は「大いなる無秩序、あらゆる矛盾と対立をさながら一つに包む実在世界そのものを象徴する言葉」(福永光司)として用いられている。そして、その「実在世界」が不運にも、人間の「作為」と「分別」を介して、あえなく死に至る様を描くのが『荘子』の趣旨でもあり、その終末論(eschatology)でもあった。この「作為」と「分別」を、この場で仮に科学や、あるいは技術という語に置き換えてみれば、このような「さかしら」(=知的処理)を通じて、下手をすると人類は、はるか中国の戦国時代とも似た状況に陥っているのではあるまいか。と、このように問い掛けているのが要するに、湯川秀樹でもあった訳であり、その点、彼と荘子とは二千年紀もの遠い時空を跨ぎ、お互いに交信(コミュニケート)をする間柄でもありえたことになる。

ことさら神秘的な、宗教や文学の話をしているのではない。それどころか、このような両者の関係は、ごく普通に、日常的に私たちが読書という行為を通じて経験しているものでもあれば、そこに本質的に内在するものでもあって、このような要素を欠いているとしたら、そもそも読書とは人間にとって、どれほど重要な、生活や人生に不可欠な営みとなりうるのであろう。その意味において、例えば先刻、ご登場を願ったばかりの福永光司が、その「湯川先生の老荘と道教」の中で、そもそも「物理」という語自体が中国の「老荘」や「道教」や、とりわけ『荘子』に由来するものであることを述べているのは参考になるし、それが結構、今の私たちの使っている、翻訳語の「物理学」(physics)の「物理」とは、その様相を違えたものであり、おまけに、それが湯川秀樹の場合には、むしろアリストテレスの「形而上学」(metaphysics)や、その「純正哲学」と、その根を通じ合うものでもありえたのではなかろうか、という指摘は示唆に富む。

ちなみに、このような日本的(Japanese=日本人的+日本語的)な物理学の一例に、と言い出すと、このような言い回し自体が意味不明な、はなはだ時代錯誤(アナクロニズム)

の、見様によっては、きわめて牧歌的（バストラル）な物言いにも受け取られ兼ねないであろうが、この一文において福永光司は、かつて湯川秀樹が「長岡先生の休学」という追懐談において話題に上せていた、あの長岡半太郎のことをも振り返っている。なお、この「長岡先生の休学」は昭和四十二年（1967年）になって、ちょうど湯川秀樹が60歳（すなわち、還暦）を迎えた年に書き、その翌年に『創造への飛躍』に収められたものであったが、このようにして湯川秀樹が「日本人科学者」（ひいては、東洋人科学者）の系譜の中で、この国の物理学の先駆者でもあれば、最長老の一人でもある、長岡半太郎と自分との繋がりを、特に『荘子』を介して物語っていたのは印象的であるし、彼が「そこには偶然の一致以上の理由があるに違いない」と書き記していたのも、なお印象的であったろう。

長岡半太郎の生まれたのは、今から155年を遡る、慶應元年（1865年）のことであるから、例えば夏目漱石や南方熊楠や、あるいは湯川秀樹の養父、玄洋の生年よりも、さらに2年早い。この二人の関係については、すでに触れた通り、湯川秀樹が昭和八年（1933年）に大阪帝国大学の講師となった折、この、いまだ新設当初の大学の初代総長を務めていたのは長岡半太郎であったことが想い起こされよう。また、それに先立って、後者が大正六年（1917年）に組織された「理化学研究所」（Institute of Physical and Chemical Research）の主任研究員となり、そこに寺田寅彦や仁科芳雄という煌びやかなメンバーが顔を揃えるに至るのは、彼らが全員、東京帝国大学において長岡半太郎の学生であったからに他ならないし、その10年ばかり前、明治三十九年（1906年）に東北帝国大学（理科大学）が誕生した際、そこに助教授となって赴任したのも、これまた東京帝国大学（理科大学）で長岡半太郎の教え子であった、石原純である。

このようにして辿り直すと、どんどん話は「混沌」の側へと引き寄せられざるをえないから、この辺りで筆を擱こう。ただし、この「理化学研究所」には湯川秀樹も、また朝永振一郎も、いたって深い関係（コネクション）を結んだことは周知の事実であるし、このような関係の逐一は、例えば宮田親平の『科学者たちの自由な楽園』に詳しいから、ご参照を。無論、この本のタイトル自体が、もともと朝永振一郎の随筆（エッセー）から、その名（科学者の自由な楽園）を借りていた訳でもあるが、この頃から100年余りの時を隔て、少なくとも湯川秀樹や朝永振一郎のような世代（ジェネレーション）が、この「科学者たちの自由な楽園」の住人であった時分から数えても、すでに90年近い歳月が経過した今、私たちが、この「科学者たちの自由な楽園」を手放しで、そのまま「栄光の理化学研究所」と呼びうるのかどうかは、やはり二の足を踏まざるをえないし、そうであるからと言って、その折の彼らの戦争責任を追及する

ことばかりに汲々とするのは、これまた勇み足であろう。

その意味において、ふたたび湯川秀樹の『深山木』の中には、ちょうどアメリカと日本との間に「太平洋戦争」の勃発した、その直前か直後かに詠まれた歌が4首、あの「紀州日高郡比井崎村」の詞書と共に収められており、そこには前掲の一首に先導され、それまで彼が一度も、その姿を目にしたこともなく、その声を耳にしたこともない、その「祖父母（そふぼ）」の歌（祖父母います／昔（むかし）しのべと／故里（ふるさと）の／家（いへ）のひとまの／灯（ひ）の暗（くら）きかも）と、さらに続けて、そこから「霰（あられ）」の歌（伯母（をば）と語（かた）る／厨（くりや）の柱（はしら）／ふとしきを／天井（てんじゃう）たかく／霰うつなり）と「木枯（こがらし）」の歌（夜（よ）もすがら／木枯をきく／家古（いへふ）りぬ／いくたびここに／よせし津波（つなみ）ぞ）とが、そこに季語を抱え込むような形で連ねられており、興味を惹かれる。と言ったのは、むしろ湯川秀樹が晩年、例の「和歌について」という講演を行なった際にも、そこで冒頭、彼は和歌や短歌を作り続けながら、裏を返せば、逆に俳諧や俳句を作らなかった理由として、この季語の存在を挙げていたからである。

繰り返しとなる点は多いが、彼の発言を再度、この場で跡付けておくと、そもそも物理学者（physicist＝自然学者）とは職業上、あるいは職業柄と言うべきであろうか、その名の通りに「自然」（physis→natura→nature）を相手にして、これと向かい合い、関わり合うのが仕事のはずである。そして、そうである以上は、和歌や短歌よりも俳諧や俳句の方が、むしろ物理学者には相応しく、似つかわしい、とも見なされ兼ねないであろう。ところが、と湯川秀樹に言わせれば、そもそも「俳句は自然というものと非常に密接な関係にあるがゆえに、逆にそれをやめ、本来非常に主観的なものであり、詠嘆的なものであるがゆえに和歌を詠んでいるというのが自分の気持ちなんです」と、これとは反対の立場を彼は唱えている。なお、この場において和歌と短歌とが、あるいは俳諧と俳句とが使い分けられているのは、それが近代以前と近代以後との、さしあたり分水嶺ともなりうれば、その里程標ともなりえたからに他ならないので、念のため。

もっとも、そのような近代以前と近代以後との、その違いを際立たせるべく、この講演の中で湯川秀樹の持ち出している「季」という語は、これを単に「季」という形で用いれば、こちらは近代以前の俳諧用語となるし、さらに遡れば、それは連歌用語や和歌用語にまで辿り着き、その射程を、どんどん日本文学の淵源にまで、それどころか、その母胎である中国文学にまで、はるかに引き延ばさざるをえないことになる。また、それとは逆に、これを季語や季題という言い回しによって一括りにすれば、それが近代以後の、いたって新しい、ちょうど湯川秀

樹の生まれた頃の、まさしく明治四十年（1907年）あたりに姿を見せたものであることにもなりうるであろう。とは言っても、そのような近代以前と近代以後との間に横たわる、ある種、日本文学の一里塚を踏み越えて、おそらく湯川秀樹が「和歌」という語を、とりわけ「短歌」という語と対比させながら、これを愛好していたであろうことも、ここで確認し、強調するべきであろうが。

ともあれ、彼が「和歌」という語で捉えていたのは、特に在原業平や、何よりも西行の歌であったけれども、彼らの歌に対する傾倒ぶりは、まず小学生の頃の『百人一首』から始まり、やがて中学生や高校生の時分、今度は『伊勢物語』や『山家集』へと、ひたすら耽溺する時期を彼は過ごすことになるのであるが、それと共に注目したいのは、その記憶が彼の父や母や、祖父や祖母や、要は家族の、はるかな血脈へと流れ込んでいくことであろう。しかも、その記憶は何度も何度も、彼が追懐しているごとく、あの京都の冬、居間の炬燵（こたつ）で蜜柑を食べながら、彼が貪り読んだ西行へと、絶えず結晶していくのであって、それは彼の自覚的な故郷が、たとい京都ではあっても、それが無自覚的には、より和歌山と通底するものであることを告げている。そのような故郷の歌を、この場は「二人の父」から借り受け、これを一旦、本節の表題（10：）に掲げることで本稿は筆を擱く。

「父母（ちちはは）の／めぐみも深（ふか）き／この国（くに）の／山（やま）の蜜柑（みかん）の／黄（き）ばむ頃（ころ）かな」

主要参考文献：

湯川秀樹著作集（岩波書店）

湯川秀樹『現代科学と人間』（1961年、岩波書店）『本の中の世界』（1963年、岩波新書）『外的世界と内的世界』（1976年、岩波書店）

随筆集：『現代日本のエッセイ・自己発見』（1972年、毎日新聞社）『随想集・心ゆたかに』（1976年、筑摩叢書）『現代の随想・湯川秀樹集』（1983年、彌生書房）『湯川秀樹エッセイ集・科学を生きる』（2015年、河出文庫）『湯川秀樹・詩と科学』（2017年、平凡社STANDARD BOOKS）

対談集：『人間にとって科学とはなにか』（1967年、中公新書）『学問の世界』（1970年、岩波書店）『半日閑談集』（1971年、講談社）『人間の再発見』（1971年、角川選書）『科学と人間のゆくえ・続半日閑談集』（1973年、講談社）『天才の世界』（1973年、小学館）『続・天才の世界』（1975年、同上）『人間の発見』（1976年、講談社）『続々・天才の世界』（1979年、小学館）

文庫本：『最近の物質観』（1939年、弘文堂）※講談社学術文庫（1977年）『目に見えないもの』（甲文社、1946年）※講談社学術文庫（1976年）『旅人』（1958年、朝日新聞社）※角川文庫（1960年）『創造的人間』（1966年、筑摩叢書）※角川ソフィア文庫（2017年）『創造への飛躍』（1969年、講談社）※講談社文庫（1971年）『宇宙と人間・七つのなぞ』（1974年、筑摩書房）※河出文庫（2014年）『湯川秀樹歌文集』（2016年、講談社文芸文庫）

生井英考『空の帝国アメリカの20世紀・興亡の世界史19』（2006年、講談社）

伊東俊太郎・坂本賢三・山田慶児・村上陽一郎（編集）『科学史技術史事典』（1983年、弘文堂）

金子務『アインシュタイン・ショック（1・2）』（1981年、河出書房新社）『アインシュタインはなぜアインシュタインになったのか』（1990年、平凡社）

河合隼雄・佐藤文隆（編）『日本人の科学・現代日本文化論13』（1996年、岩波書店）

桑原武夫・井上健・小沼通二（編）『湯川秀樹』（1984年、日本放送出版協会）
小沼通二『湯川秀樹の戦争と平和』（2020年、岩波ブックレット）
桜井邦朋『湯川秀樹・白紙の講義録』（2000年、黙出版）
佐藤文隆『科学と幸福』（1995年、岩波書店）『量子力学のイデオロギー』（1997年、青土社）※増補新版（2011年）『物理学の世紀』（1999年、集英社新書）『科学者の将来』（2001年、岩波書店）『湯川秀樹が考えたこと』（2002年、岩波ジュニア新書）『宇宙物理への道』（2002年、同上）『孤独になったアインシュタイン』（2004年、岩波書店）『アインシュタインの反乱と量子コンピュータ』（2009年、京都大学学術出版会）『職業としての科学』（2011年、岩波新書）『量子力学は世界を記述できるか』（2011年、青土社）『科学と人間』（2013年、青土社）『科学者には世界がこう見える』（2014年、同上）『科学者、あたりまえを疑う』（2015年、同上）『歴史のなかの科学』（2017年、同上）『量子力学が描く希望の世界』（2018年、同上）『ある物理学者の回想』（2019年、同上）『「メカニクス」の科学論』（2020年、同上）
佐藤文隆（監修）湯川・朝永生誕百年企画展委員会（編集）『素粒子の世界を拓く』（2006年、京都大学学術出版会）※新編（2008年）
菅野礼司（他）『東の科学・西の科学』（1988年、東方出版）『科学と自然観』（1995年、同上）
高内壮介『暴力のロゴス』（1973年、母岩社）『湯川秀樹論』（1974年、工作舎）※第三文明社（1993年）『古代幻想と自然』（1985年、工作舎）『詩人の科学論』（1987年、現代数学社）『詩人と文明の修羅場』（1997年、雁塔舎）
田中正『物理学と自然の哲学』（1995年、新日本出版社）
中野不二男『湯川秀樹の世界』（2002年、PHP新書）
野家啓一『科学の解釈学』（2013年、講談社学術文庫）『科学哲学への招待』（2015年、ちくま学芸文庫）
馬場錬成『ノーベル賞の100年』（2002年、中公新書）
広重徹『近代科学再考』（1979年、朝日新聞社）『科学の社会史（上・下）』（2002年、岩波現代文庫）
廣松渉『相対性理論の哲学』（1981年、日本ブリタニカ）※改訂版（1986年、勁草書房）
福永光司『荘子』（1955年、朝日新聞社）
益川敏英『湯川秀樹』（2011年、NHKこだわり人物伝）
松村由利子『短歌を詠む科学者たち』（2016年、春秋社）
宮田親平『科学者たちの自由な楽園』（1983年、文藝春秋）
村上陽一郎（編）『日本の科学者101』（2010年、新書館）
山﨑國紀『思索する湯川秀樹』（2009年、世界思想社）
米沢富美子『人物で語る物理入門（上・下）』（2005年・2006年、岩波新書）